
Seven Swords Story

すず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Seven Swords Story

【Nコード】

N5896N

【作者名】

すず

【あらすじ】

鏑文久遠はごく普通の高校生。両親が早くに他界した事で、お隣さんである毘森遥香の家に居候している。平凡な毎日を過ごす彼であつたが、ある日突然、奇怪な化物に襲われる。絶体絶命の彼を救つたのは、見知らぬ男を引き連れた遥香で……。そうして、彼らは呪文書を巡る争いに巻き込まれていく。

プロローグ

Seven Swords Story

いよいよ夏も本番といった高気温が街を焦がす七月中旬。

静まり返る様な夜……虫の音すら響かぬ無明の漆黒の中、寝苦し
さで目を覚ました俺は、とても不思議な夢を見た。

ああ、何を言っているんだ。目を覚ました状態で夢を見る、なん
て、そんな馬鹿な事があつてたまるか。

そう、だからコレはきつと現実で、或いはある種の白昼夢。

俺の目の前に浮かび上がる、七本の巨大な……。

吸い寄せられる様に手を伸ばす……。

始まりだ。そう、コレが始まりだったのだ。

俺とアイツの物語。現実離れた御伽噺のその序章。最初の一小
節は、静かに静かに奏でられた。

プロローグ（後書き）

初めての人ははじめまして、そうでない方はお久しぶりです。人生で二度目の長編小説となります。少しでも面白いモノを書けるよう、ちまちまと頑張っ て行きたいと思っておりますので、興味を持って下さった方、長いお付き合いになると思いますが、どうぞよろしく
お願いいたします。

六つの剣と契約の悪魔／いつもの朝

ゆさゆさ。誰かが体を遠慮がちに揺する。ああ、もう朝か……俺は覚醒し切らないボケツとした頭のまま、ゆっくりと上半身を起こした。

「あ、起きた起きた。くーちゃん、おはよう」

目を開けると、満面の笑みを浮かべた少女がいる。

腰に届く程に伸ばした黒色の長髪と、ソレと同じ深い黒の瞳。抜ける様な肌は対照的に白く、一見するとコントラストのきいた近づきがたい美少女……と言えるだろう。そう、目の前のコイツ……邑森遥香は、紛れもない美少女である。

「ん……おはようさん」

欠伸をかみ殺しながら挨拶を返す。

俺こと鰐文久遠が何故そんな漫画的シチュエーションによって目を覚ましたのかと問われれば、俺と遥香は腐れ縁……所謂幼馴染だから、というやはりお約束な回答をせざるを得ない。もっとも、全国の子馴染達がこんな事をやってるとは思えないけど……。

「ほらほら、早くしないと始業式始まっちゃうよ!」

ベッドの横で催促する遥香。時計を見るとそろそろ七時半。始業式は確か九時からだ。俺一人なら余裕の時間だけど……。

ちらり、と遥香を一瞥する。うーん、やはりここは素直に起きよう。

ここで話を少し戻すが、さつき俺がコイツの事を『一見するとく近づきたい美少女』と形容したのにはある理由がある。ちなみにソレが、俺が素直にベッドから起き上がった事に直結していたりもする。

んで、その理由ってのが……。

「おい遥香……お前、パジャマのまま学校に行く気なのか?」

「え? ……えええ!?!」

素っ頓狂な声を上げて自身の格好を確認する遥香。薄手の淡い青色のパジャマ。すっかり準備万端のつもりだったであろう遥香は、慌てて部屋を飛び出した。

そう、今みたいなうっかりこそ、アイツが「一見（似非?）美少女」である理由だ。

否、最早奴のうっかりはうっかりのレベルを超越している。そもそも、うっかりって言うのは普通の人がたまたまやらかすミスの中で、アイツみたいな常時うっかりはうっかりではない。あー、うっかりが多い！

オマケに鈍くさいというか、トロいというか……ともかく、アイツは見かけのプラスを全てぶち壊すマイナス要素を持っているのである！

と、着替えをしながらそんな事を考えていた俺の耳にドタドタという足音が飛び込んできた。今現在この家には俺と遥香しか居ないので、十中八九奴だろう。

ガチャリと遠慮がちにドアノブが捻られて、遥香がこっそり顔を出す。ドアの隙間から上半身制服下半身パジャマの珍妙な格好が見えたがあえてそこには突っ込まない。コレくらいは日常茶飯事だからだ。

「どうした？ 遥香」

「……くーちゃん、今ちよつと失礼な事を考えてたでしょ！」

びしっ！ と人差し指を立てて、そう言い切る遥香。

「……お前は時たま、やけに鋭いな」

「やっぱり！ 何となく解っちゃうんだよね！ もう、朝から私をバカにしないでよー」

なにやら不服そうにぶんぶん申している。本人としては怒っているつもりなのだろうが、制服パジャマの奇天烈さと相まってその様子はむしろ何処かマヌケであった。

「んな事あどうでも良いから、ちゃっちゃんと着替えて来い。早くしないと、始業式始まっちゃうよ！」

先ほど遥香の言った台詞をそっくりそのままお返しする。ついにてちよっと声色（というかマヌケな感じの話し方）を真似してみたり。

「むー、なんかヤな感じい」

ブツブツと文句を言いながらも、遥香はドアを閉めて出て行った。

さてと、んじゃ俺は何か食べる物でも探すかな。

ベッド付近に投げ捨てられている鞆を手に取り、俺は自室を後にする。

決してボロではないが、かなりの年代モノである廊下をギシギシ

させながら俺はお勝手へと向かう。家の中で最も奥まった箇所位置する俺の部屋からそこまでは、遥香の部屋、倉庫、風呂、空き部屋と四つの部屋を横切らねばならない。コレが中々に面倒くさかったりもするのだが……まあ居候の俺に文句を言う資格はないな。

到着したお勝手は和洋折衷の様相で、恐らく建築当時としては珍しいタイプのモノであろう。ダイニングキッチンとして作られた八畳の洋室に、六畳の和室が隣接している。

「確か、昨日買ったパンが……」

洋室の隅にある大きな棚をゴソゴソと漁る。居候歴五年目となる今年になっても、人の家の棚を弄くるのには少しだけ躊躇してしまう。

……五年。もうそんなに経ってしまったのか、あの事故から……。

在りし日を追想する。そう、ソレは雨の強い五月の事……。

力サリ、指先に感じるビニールの感触が俺を今へと呼び戻す。俺は頭を振って、その記憶を吹き飛ばした。

「……さ、朝飯だ」

コンビニの袋に詰め込まれたままの菓子パンを発見した俺は、袋の中から二個だけ取り出す。無論、俺と遥香の分である。

残りを明日の朝食にするか今日の昼食にするか悩んだ挙句、俺は袋を元の場所に押し込んだ。流石に二食連続菓子パンは辛い。

二人分の朝食を持って、俺は洋室の引き戸を開ける。

「っと」

「ひゃっ」

瞬間、廊下を走って来た遥香と正面衝突した。もともと、コイツのダッシュは普通の人の競歩並の速度なので大した被害は無いが…
…図らずも密着した格好となってしまう。

「っ、わー」

慌てて後ずさる遥香。ってかなんだその「わー」ってのは。

じゃなくって……っ。

「止まれ！」

「えっ？」

慌ててブレーキをかけるも勢いづいたアイツは簡単には止まれない。そうこうしている内に、遥香は背後にあるデカイ柱へフラフラと吸い込まれていく。

慌てて手を伸ばすが、時既に遅し。俺の手が空を切るのと同時に、ゴンという鈍い音が鳴り響く。

「い、痛い……うー」

「遥香っ、大丈夫か？」

床にへたり込んで頭を抱え込む遥香。手を退けて様子を見てみると、ちょっとしたコブが出来たくらいで、他に目立った傷はないようだ。

「まったく、気をつけないと」

「うん、いめんね」

遥香の手を取って立たせてやる。よろよろと立ち上がった遥香はコブが痛むのか、まだ頭を撫でていた。

玄関の鍵を施錠する。学校が終わるまで無人となってしまうので、安全の為にコレだけは忘れるわけにはいかない。

「よし、んじゃ行くぞ」

「うー。はあい」

気の抜けた返事をする遥香にパンを一つ渡して、俺たちは学校へと歩き出した。

……

「むー、むーむん」

「口に物を入れたまま喋るな」

「うつ！」

ていつ、と頭を軽く小突く。

確かに、歩きながらの食事なんて行儀の悪い事をしている俺たちだが、だからといってこれ以上無作法をする事はない。

もぐもぐごっくんと（コイツにしては）急いでパンを飲み込むと、遥香は俺の顔を覗き込むようにして言った。

「ねえ、クーちゃん」

「んー？」

「さっき、ありがとね」

今日はあつついなあとか、学校遠いなあとか、そんな取り留めの無い事を考えていた俺へと告げられた言葉は、なんだかよく解らないお礼だった。

その『ありがとう』が何を指しているのか見当がつかず、俺はただ「は？」と間の抜けた台詞を返した。

「頭ぶつけた時、助けてくれて」

「……助けてないだろ。助けようとしただけで」

あの時、俺の手は届かなかった。助けようとしただけで、助ける事は出来なかったのだ。

それでも遥香は、馬鹿みたいに明るい笑顔を浮かべ言葉を続けた。

「んーん。良いの、それで」

えへへへと、能天気な笑顔の遥香。

その笑顔が、少しだけ俺の胸を痛めた。

六つの剣と契約の悪魔／境界

「はぁ……はぁ……ま、待ってよー、くーちゃん」

後方五、六メートルの位置から、軟弱者の弱音が飛んできた。現時刻八時五十五分。始業式遅刻という危機的状況を回避すべく絶賛全力疾走中の俺たちであったが、案の定、遥香の奴が足を引っ張りやがる。それはもうグイグイと。

「っ、頑張れ、この坂上れば学校なんだから」

小高い山のとっぺんに立地する県立高校に俺と遥香は通っている。

山、といっても俺たちの通学路で上り道になっているのは学校前の大坂だけで、それ以外は平坦な舗装路だ。その真っ直ぐな道ですら、遥香はノロノロと歩くのである。ましてや、健全な男子高校生の俺が「うわ」と思う大坂を上る速度といったらもう……。

「ま……また……失礼な……事……」

ぜーはーと肩で息をしながら、俺の思考を読み取る遥香。無駄口は体力を消耗するだけだっていうのに……溜息でも吐きたい気分だが、そんな余裕もない。

「だあつ、もう、しょうがねえな」

なんだかもう色々と面倒くさいし時間もギリギリなので、俺は強硬手段に出る事にした。

未だに急いでるのかどうか解らない遥香の手の平をむんずと掴む。

「え」

キョトンとする遥香を無視して、俺はそのまま坂を駆け上る。勿論、後ろから「早い、早いよ!」とか「転ぶー」とか「ひゃああ」なんて悲鳴じみた声が聞こえたがそっちも全力でスルー。

授業開始のチャイムと同時に、俺たちは校門をくぐる。この分なら、講堂まで移動する人波に混ざれるな。

下駄箱で上履きに履き替える。この動作をいかにスムーズに出来るかが遅刻の割合を大きく左右する事は言うまでもない。熟練者ともなれば外履きと上履きの入れ替えは一瞬、更にかかとを踏み潰す事で靴を履く動作そのもののプロセスを短縮する事が出来るのである。

などとモノローグしてるうちに履き替え作業を完了させる俺。そして未完了な遥香。

オーケー、ここまでは予想通りだ。

なんせ遥香は座らないと靴が脱げないからな（理由・靴紐をかなりきつく締めている為。緩いとすぐに転ぶので）。俺はすかさず、リノリウムの廊下に座って靴紐と格闘している遥香の正面にしゃがみこんだ。

何とか片方は脱げたようだが……もう片方も遥香ペースじゃ遅刻は必死。ならば方法は一つだけ。俺がコイツの靴紐を解けば良い。

「ホラ、手どけて」

「あ、うん。って、わああああ」

悲鳴、衝撃、暗転。勢い良く突き飛ばされてドスンと尻餅をつく。鈍い痛みが臀部を走った。

「痛ってーな！ 何すんだ！」

「だ……だつてえー。……ぱんつ、見えちゃう」

「はあ？ ぱんつ？」

スカートを押さえ、なにやらもじもじしている遥香。まあコイツ

も一応女子高生だし、そういうのが気になるってのは理解できる……が。

「状況考えろ！ 今はそんな場合じゃねーだろー！」

「そんなあー、くーちゃん酷い」

「ああ、うるせえ！ んなこたあ良いからちゃっちゃと脱げよ！」

流石の俺もいい加減イライラしてきた。パンツとかスカートとか無視して靴紐に手を伸ばした瞬間……。

「せんせー、久遠が遥香ちゃんを襲ってまーす」

背後から……誰かの声が響いた。

「なっ」

誰だか知らんが、そんな誤解を招くような事を言われたんじゃたまらない。

俺が遥香を襲うだって？ 真相はその逆、むしろ甲斐甲斐しく遥香をサポートしてやろうってのに。とりあえず事の顛末を聞かせてや

ろうと俺は慌てて振り返る。

「よっ、お二人さん」

そこに居たのは、黒い髪の毛をさっぱりと切り整え、メガネをかけた一見優等生……クラスメイトの滝原真吾であった。

「おいおい、そこは悪友が正解だろ！」

「クラスメイトなんて、他人行儀だよーね」

「朝から俺の思考だだ漏れっ！？　じゃなくって……あんまり妙な事をデカイ声で言うんじゃないよ！」

なんだか妙なノリになってしまったが、俺は本来の目的を達成するために真吾へそう告げた。ただでさえ居候の件があるのだ、これ以上不穏な噂を流されては学校に居場所がなくなってしまう。

ちなみに俺が遥香の家に居候をしている事は誰にも言っていない。最も、毎朝一緒に登校している事で、何人かの生徒に「何かあるんじゃない」と思われているみたいだが。

「解ってるって。お前にそんな度胸がない事くらい百も承知よ」

「……それは喜んで良いのか？」

信用されてるって意味でとるべきなのか。言葉通りの意味なのか。

「うんうん、くーちゃんビビりさんだもんね……あいたつ」

ニヤニヤした顔で便乗するポンコツ頭に愛の鉄槌チヨツを喰らわしてやる。ったく、コレでちよつとは緩んだネジが締めれば良いんだが……。

「うー、女の子に手を上げるなんてえ」

涙目の遥香が、うーうー唸りながら文句を垂れる。そんなに強くやった覚えはないが、そう言われると男としてちよつと心が痛い。

「あー、もう。良いんだよ、お前は特別だから」

苦し紛れにそう言い放つ。まあ幼馴染だし、昔から何度もこういうやり取りしてたからな。

が、何故か二人は俺の想像とは違う反応を返す。

「あ」

「お」

「ん？」

ちなみに順番は、遥香、真吾、俺。

なにやら奇妙な沈黙が場を支配する。なんだ？俺が何か変な事言ったか？

……。ただただ静かな時間。耐え切れなくなって声を発しようとしたその時、第三の人物が現れた。

「遅刻者、三名。……君たち、クラスと名前を教えて貰おう」

凜とした声。肩で切り揃えられたとび色の髪の毛と線の細いシルエット。すっと通った鼻筋と細く鋭い眼光。そして何よりも目立つのは左腕につけられた腕章……。

生徒会長、白堂正輝である。

そうして、俺たちの遅刻は確定した。

私たちの一日に昼と夜がある様に、この世界にも表と裏が存在する。

通常、我々に認識される事の無い裏側の住人達はけれども確実に、世界の半分を支配し、跋扈している。

魔術師と呼ばれる人々もまた、そんな闇の住人の一つだ。

彼らは大抵、自らの願望成就の為に研鑽し、研究し、実験し、実践する。

そうして出来上がった『魔術』と呼ばれる奇跡の体現は、一種の学問的体系すら生み出しつつ、自らの子、弟子達へ脈々と受け継がれてきた。

「勿論、魔術師じゃない人には秘密でね」

「……なんで内緒なの？」

目の前で静々と語る父へ、幼い少女はそう尋ねた。

一点の曇りすらない、無垢なる疑問。父親は少しだけ目を細め、少女の頭を優しく撫でてから言った。

「魔術はね、人を傷つけるからさ」

頭にのせられた大きな手。少女は父親の暖かい手が好きだった。その手に撫でられるといつだって優しい気持ちになれるし、駆け寄ればいつだって大きな手で抱いてくれた。

だから少女は父親の言葉を信じる事が出来なかった。誰よりも優しいあの手が、人を傷つけるなんて思えなかったからだ。

そう、彼女の父親もまた、魔術師と呼ばれる者たちの一人であったのだ。

「それじゃあパパも誰かと喧嘩したり、いっぱい怪我させたりするの？」

少女は今にも泣き出しそうな顔で、恐る恐るそう尋ねた。

「それはあくまで内緒にしておく理由だよ。良いかい？ 魔術って言っただって、結局は機械なんかと一緒にだ。使う人次第で、人を助ける事も出来る……ソレを忘れちゃ駄目だよ、はるか」

彼女とは対照的な明るい笑顔で、父親はそう告げた。

彼女もつられて笑い出したくなるような、そんな笑顔だった。

……

「お父さん、見守っていてね……」

幼い日。遠い昔……父がまだ家に居た頃の記憶を呼び覚まし、少女は小さくそう呟いた。

時は九月九日、深夜も一時を回った頃だろうか。彼女……邑森遥香……は、普段のソレとは違う、どこか物憂げな表情を湛えて空を見上げた。

笑む三日月。黒の下地に輝く金平糖。絢爛たる夜空の瞬きが、彼女の決心を強く強く固める。

邑森家の裏庭……山肌に面して建築された母屋の、山と家との狭間。なんて事のないその空間は、けれど少女にとっては重要な意味合いを持つ場所であった。

山と家……自然と人との境界は即ち、現世と隠世の境界線である。

人間の、或いは肉体の領域である現世と……心霊、或いは魂の領域である隠世。本来ならば交わる事のない二つの世界が交わる所……彼女が現在立っている其処も、そんな場所の一つだ。

「……っ」

視線を正面へと向ける。鬱蒼と茂る、山の木々がざわめきだす。

彼女の右手には、小さな銀のリングが握られていた。目を凝らすと、環の淵に細かい文字が彫られているが、装飾と言えばそれだけの無骨なデザインだ。

遥香はそのリングを無造作に、足元目掛けて投げ捨てた。

くると回転し、宵闇の中を落下していく銀色の環。ソレが地面へと接触する瞬間、遥香の網膜に激烈な閃光が映る。

……繋がった!?

眩しさに瞼を閉じるが、その光は網膜へ直接注がれているのか、彼女の視界は白く染まったままである。

得体の知れない感覚が、少女の足元から立ち昇った。

怖い、怖い……。突然視界を奪われた事と、ソレを生まれて初めて行つという事実、彼女は恐怖した。

闇雲に伸ばした手。虚空へと突き出された筈のソレはしかし、生暖かい壁に触れて止まった。

驚きに声を上げるよりも早く、その手は暖かな壁を突き抜ける。

例えるのなら、人肌に近い温度のゼリーだ。壁だと思ったソレは、柔らかに遥香の右腕を飲み込んでいく。

限界だ。少女は冷や汗と涙で濡れた顔を振って、右腕を勢い良く引き抜いた。

刹那……その手の平を、誰かが掴んだ。

向こう側の、誰かが掴んだ。

六つの剣と契約の悪魔／変容

九月十日。始業式の大遅刻以降これといった失敗も無く、俺と遥香は極々平凡な……ありふれた毎日を過ごしていた。

（ん、ソレって変じゃねえか……？）

これといった失敗が無いなんて事、今までの俺たちにあっただろうか。

答えは否、断じて否である。

そう、否であるのだが……。

よくよく考えてみれば、失敗（というか遥香のうつかり）が無いってのは良い事なワケで……。だからソレに違和感を感じる事も、変だなと思う必要もないのである。

だってのに……。

ちらりと右斜め前方に視線をやる。授業中だというのに机につっぱして、すやすやと寝息をたてている遥香が見えた。

（やっぱり、ちょっとおかしいな）

遅刻、ド忘れ、勘違い——遙香のやらかす色々な失敗の中に、けれども『授業中の居眠り』は含まれていない。

生真面目なアイツは、『怠慢』を原因とする失敗はしないように努めている。先に上げた様なミスは、怠慢ではなくアイツ自身の要領の悪さが原因である場合が殆どだ。

「おい、久遠」

後ろの席から小声で俺を呼ぶ声が聞こえる。真吾だ。先生に勘付かれないよう僅かに上体を逸らせて、視線だけで「なんだ？」と返事をする。

「めずらしいな、ほれ」

視線の先には遙香。どうやら、真吾も遙香の居眠りが気になっていたらしい。

「遙香ちゃん、疲れてんのか？」

「……さあな。単に寝不足じゃねーのか？」

他に原因も思いつかないし、恐らく寝不足で間違いないだろう。

真吾もそれで納得したようで、「ふうん」と言っただけ黙ってしまった。

放課後。帰宅部の俺は特にする事も無く、けれど真っ直ぐに帰るものもなく嫌だったので校舎の中をブラブラと歩いていた。

入学してから一年と半年が過ぎるが、未だに行った事の無い教室もある。それもそうか。例えば、物理実験室や音楽室などは選択科目でその授業を選ばない限り、普通の授業で使う事なんてないのだから。

「よし、ちょっと見て回るか」

そういう教室に行ってみるのも面白そうだ。ちょっとした好奇心から、俺は行った事のない教室巡りをする事にした。

とりあえず一番近くにあった図書室に向かう。少々古びた本棚の中にぎっしりと詰め込まれた沢山の本。広い教室の中には独特の雰囲気広がっていて、なんだかくらくらする。

埃っぽい印象だが、手入れはしっかりと行き届いている……管理人の先生がキチンとした人なのだろう。

本棚に囲まれる様に配置された閲覧席……といってもただのテーブルだが……には、二三人の生徒たちが腰掛けて何やら難しそうな本を読んでいた。

邪魔になっただけ嫌なので、俺はそそくさと退散する。

「――ふう」

なんだか緊張した。ああいう静かな空気は少し苦手だ。

気を取り直し、次に向かうは音楽室。図書室隣の階段を上がってすぐの所だ。

ドアの硝子越しに中を確認する。どうやら誰もいないみたいだな。

音楽室へ入ろうと左手をドアに伸ばす、その時。

「あれ、鰐文くん？」

背の低い女子生徒と出会った。

名前は東城千尋。ショートカットの黒い髪と、活発に動く大きな目が特徴で、誰とでもすぐに仲良くなる人懐っこい性格の持ち主だ。

今年は別のクラスになってしまったが、去年は同じクラスって事もあってかちよくちよく話したもんだ。よくウチのクラスに遊びに来ていた遥香や真吾とも仲良くしてたな、そーいや。

「よう、東城。ってお前、吹奏楽部だったっけか？」

首からぶら提げられた金管楽器——確かサックスって言ったか——を見て、俺はそう尋ねた。

「そうだよ。今からみんなで全体練習やるんだ」

サックスを誇らしげに見せながら、そう答える東城。低い身長のせいか、楽器がやたらとでかく見える。本人には言わないけど。

「あー、じゃあ俺はお暇するわ。邪魔になっちまうし」

くるりとその場で回れ右をする。と、そんな俺の肩をがしいと掴んで、東城は言った。

「見学してけばいいじゃん！　楽しいよ！」

「や、俺リズム感ないしさ」

目をキラキラさせている東城の誘いを断るのに少しだけ罪悪感を感じるが、帰宅部生活を捨てる気もないのでやんわりと拒否する。

すると東城は一瞬だけ残念そうな顔をした後、「まあ気が向いたらおいでよ」と笑顔でそう言った。

じゃあなと手を振って、俺はその場を後にする。

トボトボと廊下を彷徨う。うーん、そろそろ帰ろうかな。外も夕焼けに染まり始めて来たようだし、暇潰しももう良いだろう。

テスト期間だったら真吾なんかと遊びに行くだけだなあ……。陸上部に所属している悪友の事を思い出しながら、俺は下駄箱に向かう。

赤の陽射し。昼なのか夜なのか……。なんとも曖昧な、夕方の空気。帰る奴はとくに帰り、そうでない者は部活や委員会活動をやっている、そんな時間に。

一人、昇降口に佇む遥香を見つけた。

「……一人なんて珍しいな」

踵の潰れた靴を手早く履き、そう言いながら遥香に近づく。

いつもならこの時間はクラスの女子達と遊びに行くか、でもなければ家に帰ってテレビでも見ているのに……。やっぱり調子でも悪いのだろうか。

「遥香——？」

ポンと肩に手をやる。瞬間、遥香はビクッと体を震わせ、ワンテンポ遅れて「きゃあ」と小さく悲鳴を上げた。

「お、おいおい」

「っ、て、あれ……くーちゃん？」

キョロキョロと辺りを見回してから、不思議そうな顔を俺に向ける。

「大丈夫か？ 調子悪そうだなぞ」

ちよっただけ屈んで、遥香の顔を覗き込む。

「顔っ！ 顔近いよぉー」

「こうしなきゃ解んねえだろが。ほら、ちよっとおでこ出せ」

顔色はそう悪くもないようだが、熱があるかもしれない。右手を遥香の額に、左手を自分の額に当てて熱を測る。

「んー。若干……あるかもな」

「うう、いま上がったのかも」

まあ心配する程じゃないが……万が一もあるし、グダグダしてないで帰ろう。そう言って遥香と共に帰路につく。

「今日は早く飯食ってすぐ風呂入ってちゃっちゃんと寝ろよ」

「平気だよ、ちょっと眠いだけだから……」

って言ってる割には足元フラフラじゃねーか。

仕方が無い——見てるこっちが落ち着かないので、俺は最終手段を使う事にした。

足元のおぼつかない遥香を一旦ストップさせ、それから俺は奴に背中を向け屈みこむ。さあ、コレでもう通じただろう。

「……どうしたのくーちゃん？」

が、期待を裏切らないポンコツっぷりの遥香は俺の意図などコレ

ッぽっちも読み取れて無いようだ。

「馬っ鹿、背中向けてんだから言いたい事は一つだろうが」

「——痒いの？」

「負ぶってやるって言ってるの!!」

だあー。自分で言うときげえ恥かしい。だから言いたくなかったのに。

「え、ええええええ!!?」

例によって、ワテンポずれたリアクション。大仰に驚いている遥香のやかましい声が、夕暮れの街に木霊する。

俺は耳がキーンとするのに耐えながら、ジロリと遥香を一瞥した。

それでも遥香は渋っていたが、結局は負ぶさる事を覚悟したらしく、しおしおと俺の背中へと歩み寄ってきた。

「……………」

が、やはり踏ん切りがつかないのだろう。遥香は、俺の真後ろまで来た所で動きを止めてしまう。

「うつつ、やっぱり恥かしいかもー……胸とかアレだし」

「黙れ。俺だって恥ずかしいんだぞ」

じゃあ止めれば良いのになんてぶつぶつ言いながら、ようやく遥香が俺の首に手を回した。

「つと、せい」

掛け声と同時に立ち上がる。わ、と肩の辺りから遥香の声が聞こえた。

遥香の体温を感じながら、アスファルトの道を踏みしめて歩く。

最初は「重くないー？」とか「あんまり背中に集中しないでね」なんて言ってた遥香だったが、十分もしないうちに静かになり、寝てしまった。

ふうと小さく息を吐き出す。思ったよりもずっと軽かった幼馴染が起きないように、俺は少しだけ歩く速度を落とした。

……

三十分後……。太陽がより水平に近づき、夕方から夜へと少しずつ景色が変化していく中で。俺はようやく、家まで後二三百メートルといった所までやって来ていた。

想像よりも軽かったとはいえ、それでも人を一人担いで歩くのは正直しんどい。

「こりゃ、明日は筋肉痛だわ……」

足が棒みたいだ。オマケに汗も——遥香の寝汗と相まって、もうベタベタで酷い。早く風呂に入りたいなあ。

一步一步がずしりと重い。が、此処まで来たら俺も意地だ。家までコイツを負ぶってやろうじゃないか。

と新たに気合を入れなおした瞬間、後ろで眠っていた遥香がもぞもぞと体を動かした。

「——」

どうやら目を覚ましたらしい。せっかく人がやる気を出したというのに……。タイミングの悪い奴だ。まあソレならソレで楽になるか

ら良いんだけども。

が、目を覚ました筈の遥香はしかし、何故か俺の背中から下りようとしなない。二度寝でもしたのだろうか。なんて考えはすぐに打ち碎かれる……遥香自身によって。

「——来る。下ろして」

冷たい、冷徹な声。おおよそ遥香らしく無い声で、背中の遥香はそう言った。

「お、おい。大丈夫か」

何やら様子がおかしい。だが、遥香は俺の問いかけを無視し「早くして」と呟いた。

なんだか解らないがここは従った方が良さそうだ。俺は勢いがつかないよう気をつけて遥香を下ろす。

「ありがとう——久遠」

「なっ、あ」

言葉にならない、ただの音が洩れる。遥香が俺を名前で呼ぶなんて……。

その時になって、俺の中で一つの予感が……不穏な予感が、むくりと顔をもたげた。

今、隣にいるコイツは……本当に遥香なのだろうか？

遥香に良く似た……別の誰かなんじゃないだろうか？

「遥、香？」

「静かに——来るわ」

来る？ 何が？ 一体、遥香はどうしてしまったのだろうか？

ただただ混乱するばかりの俺に、遥香は小さく、けれどハッキリと通る声で宣告した。

そう、遥香に似たソイツは、確かに俺へと告げたのだ——

——日常の終わりと、新しい日常の始まりを。

六つの剣と契約の悪魔／悪魔、来たりて

はじめ、ソレは霧か何かに見えた。

細やかな粒子がさらさらと大気に揺れ、黄昏のオレンジと混ざって溶ける。

湾曲する風景。なんだろう、この嫌な感じは。

俺はごしごしと目を擦る。けれど捻じ曲がる視界は酷くなる一方で、地面さえ不確かになりそうだ。

そうしてその滅茶苦茶な空間から染み出す様にして、ソイツは突然現れた。

「う、うわああああっ！」

なんだ——なんだコイツは！？

銀色に光る獰猛な瞳。発達した前足と、それ以上に膨れ上がった後ろ足。黒々とした体毛は奇妙に揺れて、その異様さを際立たせていた。

ソレを一言で形容するのなら、『馬鹿でかい黒犬』が適当だろう。俺の持ち得る語彙の中に、それ以上ソイツを的確に表現できる言葉はない。

だがしかし……目の前に存在するソイツを、俺は『犬』と認める事は決して出来ないだろう。

だってソイツには——本来ある筈の無い、五本目の足が生えていたのだから。

「っ——久遠、逃げるわよ」

遥香が俺の手を引くのとほぼ同時に、背中から天を突く様に伸びたソレが小さく二度痙攣した。

家とは反対方向へ走り出した俺たちの背後から響く、地鳴りの様な音。大気を振るわせるアイツの唸り声が、ソレの開始を俺たちに教えていた。

狩りの始まりを、教えていた。

「はっ……はっ……おい、遥香……」

水平線へ吸い込まれる太陽を追いかけるみたいに必死に走る遥香。言葉遣いや態度こそ平素のモノと違うものの、その鈍足はいつも通りのアイツのまんまで……俺は少しだけ安心して声をかける。

街を縫う様にして走っていた遥香はちらりと後ろを一瞥し、黒犬

が追って来ていない事を確認すると足を止めた。

「なんなんだ……アイツは一体なんなんだよ？」

「——黒の獵犬」

まるで当たり前の事みたいに淀みなく、遥香はそう答えた。

同時に、移動を再開する。

「犬に似ているからそう呼ばれているけれど……正真正銘の——
悪魔よ」

「……は？」

住宅街を小走りに行く俺たち。なおも話しを続ける遥香と黙ってソレを聞く俺。が、そのあまりにも非現実的な単語が出た瞬間、俺はつい声を上げてしまった。

……悪魔？ 今、コイツ、悪魔って言ったのか？

「おい、お前さっきからおかしいぞ！？ 一体どうしたってんだよ！」

「私はいたって正常よ、久遠。それに――」

「その口調がすでにおかしいだろ」そう口にしようとした俺はしかし、遥香の視線が一点に注がれた事に気がついて止めた。

僅かに焦りを孕んだ視線。俺の背後へ向けられた震える視線が、言葉よりも雄弁にその事実を語っていた。

ゆつくりと、ソレを刺激しないように振り返る。

橙色の空間。墨汁を落とした様に、黒いシミがポツンと見えた。

「――話をしていいる余裕はないわね」

言葉が終わる瞬間、黒色の獣の体が弾けた。

強靱な四本の足が地面をタンと蹴りつける。それだけでソイツは、百メートル前後あった俺たちとの距離の三分の一を縮めた。

疾走というよりは飛行に近い黒犬の高速移動。奴が二度目に地面を蹴り飛ばした瞬間、俺はワケも解らず走り出す。

何か考えがあつての行動ではない。ただ己の内に存在する衝動に任せて、自殺にも等しいソレを決定した。

「遥香、逃げるッ！」

目標はあり得ない速度で空を切る。俺はただ時間を稼ぐ為だけに――つまりは、ソイツの餌になる為に――捨て身の覚悟で飛び掛る。

何故だろう。コンマに満たぬその瞬間に、脳裏を過ぎる一つの疑問。

人間は自分の命が一番大事だ。身を挺して他者を守るなんて、そんなモノは絵空事で。じゃあなんで俺はこんな事をしてるんだ？

「あ……」

接触の瞬間――

俺が迫る死を感じた瞬間。黒犬の五本目の足が、奇妙に形を変えた瞬間。街が、夕暮れから夜へとその有様を変えた瞬間。

――その瞬間、俺は遥香の声を聞いた。確かに声を聞いたんだ。

「繋がった」

ボソリと小さな声で、遥香はそう呟いた。

俺がその声を認識できたのは、単に黒犬との衝突を避けた為である。

否、避けたのではない。既に軌道修正は不可能と思えた黒犬が…
…あろう事が空中で、その進行方向を変えたのだ。

人の腕に酷似した形へ変貌した猟犬の足が、何も無い中空を掴む。同時に、肘関節がぐいと曲げられて、黒犬は俺を大きく飛び越した。

まるで恐怖に駆られた様に——そこに怖いモノでもいるかの様に——黒犬は一心不乱に遥香を目掛ける。

「はるかッ」

手を伸ばす、が間に合わない。遥香へ飛び掛った化物を止めるには、俺の動きは遅すぎたのだ。

ああ、まただ。俺の中の何かがざわつく。ソレは多分、忘れた筈の古くて苦い記憶。

伸ばした手の、その先のアイツが……。

思考が白く染まる。駄目だ、コレは思い出しちゃ駄目なんだ。

フラッシュバックする一瞬の幻影と、現実が交錯する。

遥香へと吸い込まれていく、黒の猟犬。背から伸びる腕が、くん、としまった。

喰われる、遥香が喰われてしまう。そんな漠然とした……けれど
も何より確実な未来の予感が、俺の背筋を凍らせる。

どんなに祈った所で……俺にはアイツを救えない。伸ばした手は
届かない。

無力な俺を嘲る様に、黒い犬の暴腕が遥香の頭蓋へ振り下ろされ
る。

不遜に笑う、遥香の頭へ——？

遥香——なんで、笑って——？

そんな疑問も、次の瞬間には吹き飛んでいた。

「来なさい——っ」

命令。有無を言わさぬ、絶対的な強さを含んだその声が大気を震
わせる。

答える様に、遥香の頭上には見た事のない文字が連なって描かれ
た図形が現れた。

淡く、青く光る奇妙な図。温度を感じさせないぼやけた光に照ら
されて、遥香の姿が闇の中に妖しく浮かぶ。

その非現実的な光景は……実際にこの目で見ていても信じられな

いその光景は……けれども、とても美しかった。

まるでその光を避ける様に宙で体を捻ると、猟犬は僅かに後ずさる。

喉を鳴らし威嚇するソレを意にも介さず、遥香は右腕を天へと向ける。

とぶん。謎の図形へ遥香の右腕が触れた瞬間、ソレはまるで水面みたいに波打った。

淡い光に飲み込まれていく、遥香の細い手首。そうして肘までが不可視の領域に消え去った時……黒い猟犬は再び遥香へ飛び掛る。

今度はもうたじろがない。猟犬の腕が遥香を捉えた。

風を切り裂く速度で振るわれる黒腕。

刹那、遥香は頭上へ掲げていた右腕を勢い良く振り下ろした。

「なっ、あ？」

今度こそ完璧に、完全に。俺は言葉を失った。

ドスン、重たい音が耳に飛び込む。ソレに潰される形になった猟犬は、甲高い悲鳴を上げた。

青く光る図形が、すうと消えていく。遥香は右腕を下ろした格好

でその動作を止めていた。

右腕の先には……何故か右腕があった。

いや、こう言つとまるで右腕だけがあったみたいでちょっとグロテスクだから言い直す。正しくは、誰かの右腕を遥香が掴んでいた……？ いやいやいや、これもあんまり変わらないような？

自分でも解る程に混乱する。つまり、滅茶苦茶だった今までの流れをぶっ壊すくらい、ソレは破天荒だったのだ。

深呼吸を一つ。俺はその出来事を整理する。

光る図形の中突っ込まれていた遥香の右腕。ソレをアイツが引き抜いた時、その光の向こうから『誰か』が現れた。

そうして『誰か』は、まるで一本背負いを決められたみたい……背中から地面に激突し……都合の良い事に、地面と背中の間には黒の猟犬が挟まれた、と。

「痛っ、……？」

響くテノール。男性の声。背中を地面に打ち付けた筈のソレは、けれど何事もなかったみたいに立ち上がる。

そうして一言……まるでこの場の空気を読めていない一言を言い放つ。

「——夢？」

キョロキョロと辺りを見回す男。どうやら本当に今の状況が解らないらしい。

……もつとも、解らないのは俺も一緒だったが。

宙から現れた男が立ち上がった事で開放された黒犬が、よろよろとその体勢を立て直す。

張り詰めていた空気はなんだかワケの解らないモノになり……俺は、依然として危機的状況に変わらない事を忘却していた。

そんな珍妙な空気の中、一番先に行動を始めたのは、一人だけ状況を理解している遥香であった。

謎の男には目もくれず……遥香は俺の方へと走り寄る。

そうしてがっしりと俺の腕を掴み……そのまま元来た方向へ俺を引っ張ってゆく。

「お、おい」

「良いから、早くっ」

その顔は……今までに見た事もないくらいに真剣で……だから俺は黙って後について行く事しか出来なかった。

「失敗、したなんて……」

独り言だろうか。泣きそうな表情を浮かべた遥香は、それでも俺の腕を引っ張る事を止めない。

一分ほど走っただろうか。はたと遥香の足が動きを止めた。繋いだ手の平が、じつとりと汗ばむのを感じる。

「そん、な」

俺たちの目の前……まるで行く手を遮るように、ソイツは静かに立っていた。

五本目の足を持つ犬に良く似た黒い悪魔が、静かに静かに立っていた。

六つの剣と契約の悪魔／悪魔、来たりて（後書き）

興味を持ってくれた方、ありがとうございます。作品に関するご意見・ご感想ありましたら是非、お聞かせ下さいませ。

六つの剣と契約の悪魔／はじまりのつるぎ

地響きめいた唸り声。感情の無い瞳が炯々と光る。今にも飛び掛つてきそうな化物を前にして——死、という逃れえぬ結果を目前に控えて——それでも俺は生き延びる為の方法を探していた。

横目で遥香を見やる。この得体の知れない化物の事を、なぜかコイツは知っていた。ならば、その対処法も、もしかしたら知っているかもしれない。

「……遥香」

黒犬から注意を逸らさぬよう気をつけて、小声で遥香に呼びかける。

だが、呆然と立ち尽くす遥香はただただ化物を眺めるばかりで、俺の言葉に答えようとはしない。

他にどうする事も出来ない俺は、仕方なしに、今度はもう少し大きな声を発する。

「は——」

声帯から生じた音が声として空気を震わせる。彼女を指す三文字の言葉の一つ目が伝播すると同時に、黒の獵犬が飛び上がった。

赤く裂けた口から覗く、おぞましい牙と牙。

びっしりと並んだするどい凶器が、俺の喉を喰い千切らんと、その先端を光らせる。

薄汚く黄ばんだ三角錐のソレはまるで刃物みたいだ。肉を裂き、骨を砕く為に発達した器官。ソレにかかれば俺なんて、きっと豆腐と大差ないだろう。

ああ、嫌だ。俺はここで死ぬのだろうか。

こんな良く解らない、ありえない化物に殺されて……俺は死ぬのだろうか。

まるで氷の塊を背骨にぶち込まれたみたいで、今までに味わった事のない悪寒が俺を貫いた。

同時に——世界が入れ代わる。

おぞましい程に黒かった夜の景色は、一転、無垢なる白に染め上げられた。

ゆらゆらと揺れる白い世界には……何故か死んだ筈の両親がいた。

「久遠……」

響く、懐かしい声。忘れたと思っていた二人の声がハッキリと俺へ届くたび、きゅうと胸の奥が鈍く痛んだ。

「久遠……」

ああ、父さんと母さんがいる。ただそれだけの事実が、その他の思考を残さず消し去る。

二人のいるこの現実には、俺は何の疑問も抱きはしなかった。

そうして俺たちは、気付けば夕暮れの公園にいた。

ギィ、ギィ。乾いた音を立てるブランコ。暖かく大きな手が俺の背中に触れるたび、俺の体は風を切って空へ向かった。

オレンジの風景。微笑む母さん。振り向けば、父さんも楽しそうに笑っていた。

そして隣のブランコには……。隣のブランコにはドンくさいアイツが……。

「はるか」

ギィ。答える様に、無人のブランコが風に揺れる。名前の主はそこにはいない。

にゃあと、猫の鳴く声がした。目を向けると、公園の外、道路の真ん中に白い子猫が佇んでいた。

——轢かれる。

何となくそう思った。

その残酷な直感が俺へと降り注いだ時、今まで何処にいたのか知れない遥香が、視界の隅から飛び出した。

「なっ」

なんであんな所に、なんてのはどうでも良い思考で。悪い予感が消えるどころか、その強さを増していく。

死ぬ——遥香が、死ぬ——？死ぬって——何だ？遥香が、いなくなる？

そんなのは、嫌だ！

気付けば俺はブランコから飛び降りていた。

だん、固い地面。両足がビリビリする。俺が行って何が出来たのか、そんな事は解らない。けど、遥香がいなくなるって考えたら、いてもたってもいられなかった。

「はっ……はっ……」

息が上がって、お腹が痛くなるけど、それでも俺は全力で走る。

遥香が猫を抱き上げた。ニコニコと、嬉しそうに笑った。

クラクション。ああ、やっぱりだ。巨大な物体が、遥香に迫る。

「はるか——！」

手を伸ばす。小さい手を、一生懸命に。

助けたい、失いたくない。ただそれだけを考えて、俺は遥香に手を伸ばす。

伸ばした手の先にアイツがいる。

そこで俺の意識は途切れた。

プツリと断絶した意識が戻った時、俺は自分の部屋にいた。

「……」

嫌な汗。強烈な不快感に、俺は布団を跳ね除けた。

最近は見えてなかったのに、なんでまた……。俺はたった今見た夢を思い返し……。ふっと気がついた

目の前に浮かぶ、七本の剣に。

「なんだ……コレ」

自然と洩れる声。俺はまだ、夢の最中にいるのだろうか。

七本の剣は何に支えられるわけでもなく、ソレが当たり前、といった感じで宙に浮いている。

ありえない、こんな事。そう思いながらも、俺の右腕はまるで吸い込まれるみたいに剣へと伸ばされた。

それが自分の意思によるものか、それとも、その剣の持つ神々しさによって生み出された不思議な力によるものか……。判断はつかなかった。いや、そもそもそんな事を考える余裕もなかった。

ただ俺はぼんやりと、暑い夏の日に、似たような夢を見た事を思い出していた。

ゆるゆると剣へ吸い込まれる。俺の右腕は、迷う事無く中央の剣——他のモノと比べると装飾も少なく、とてもシンプルなデザインだ——を握りこんだ。

瞬間、剣の刀身が、青白く発光する。暖かく、優しい光だ。光は
どんどんとその強さを増し、ついに俺は目を開けていられなくなっ
た。

それでもなお強くなる光。瞑った瞼の向こう、輝きの中央に、何
故か俺は父さんと母さんを感じた。

そうして次の瞬間に、セカイは元の昏さを取り戻す。

「――あ」

迫る、黒い犬。死の淵に立たされた状況は、どうやら夢ではなか
ったようだ。

意識の断絶は一瞬だったのだろうか。たった今起こった現象は、何
か特別なモノだったのだろうか。それとも、ただの走馬灯だったの
だろうか……。

どちらでも良いか、考えたってしょうがない。

諦めにも似た感情が俺を支配する。そうさ、もうどうしようもな
い。俺には、こんな状況を打破できる力なんてないのだから。

牙。獣臭。鮮血の予感……。

ああ、それでも……。

先ほど見た光景を思い浮かべ、俺は一つだけ、誰ともなしに願う。

せめて、遥香は助けたい。

幼馴染の——鈍くさくて、要領の悪い女の子を思い浮かべて。

結局届かなかった右腕で……アイツを助けられなかった俺が……それくらいは、許されても良いんじゃないか。

そんな、幸せな、有り得ない奇跡が——起きてても良いんじゃないのか。

「ッ」

勿論、そんな都合の良い奇跡なんて起きる筈はなくて……。だからきつと、俺たちを救ったのは、何処かの誰かが仕組んだ『何か』だったんだろう。

それでも他に助かる方法なんてないのだから、俺はソレにすぎらない。

そう、ソレが例え、更に大きな災厄をもたらすのだとしても……。

「おおあああああああああああ」

ソレは、純粋な恐怖から出たモノなのか。それとも、遥香を助きたいという叶わぬ思いが、声となって炸裂したのか。或いはその両

方か。

死の、一瞬前。力任せに、容赦なく開かれた上あごと下あごが、俺へと到達する直前……闇雲に突き出した右腕に、鉄の重さを感じた。

——剣。直感する。コレは『夢で見たあの剣』……宙に浮かんでいた、七本の剣の内の一本だ。

迷う必要は無い。俺は剣をしっかりと握り締め、黒い犬へ叩きつける。

「だああああ」

無論、化物はすぐそこにいる。こんな近距離で剣なんて振るえるワケはないのだから、俺の目論みはあっさりと外れた。

けど、不幸中の幸いだったのは、その剣の出現に犬が一瞬たじろいだ事か。その僅かな迷いが、俺に幾許かの猶予を与えた事になったのだから。

かくして、一方的にやられる筈であった俺はしかし、猟犬ともつれ合うようにして地面を転げまわった。

固いコンクリートに背中を強く打ち据えて、呼吸が一瞬停止する。痛みと苦しさに襲われて……けれど悠長に呻いている暇はない。

よろめく足を無理矢理動かし、出来るだけ早く、立ち上がる。

視界の隅に、駆け寄ってくる遥香が映りこんだ。どうやら俺を助けようとしているらしい。

だが、そんな事はさせられない。

子猫を抱き上げた遥香がフラッシュバックして……あんな光景はもう見たなくなつて。

気付けば「逃げる」と、そう叫んでいた。

遥香の足がピタリと止まる。

同時に、起き上がった黒犬が再び俺へと牙をむいた。

「くっ」

が、今度は剣を構えるだけの余裕がある。剣なんて扱った事無いから、物凄くデタラメだけれども。

「くらえっ」

デタラメな構えから、デタラメな太刀筋で剣を犬へと振るう。目標は頭。刃は馬鹿正直に縦の軌跡を描く。

飛び掛る犬の脳天へ、剣は真っ直ぐに突き進み……けれど直撃の

瞬間、背中から生えた腕が流体の様に刀身へと絡みつき、勢いと切れ味を殺しつくす。

結果的に頭を殴るだけになってしまった俺の攻撃は、犬の動きを止める程の威力を発揮せずに……多少スピードは落ちたものの、猟犬の体当たりをモロに受けてしまう。

「があっ」

チカチカと、視界が点滅する。遅れて、鈍い痛みが腹を中心にやってきた。

吐き気を堪えて、立ち上がろうとし……黒の猟犬と目が合った。倒れた俺を踏みつける様にして、ソイツは俺を見下している。

死んだな、畜生。心の中で悪態を吐く。怖さとかそういう感情は全て吹き飛んでいた。

足掻くだけ足掻いた……その結果がこんな無様なモンじゃあ、納得なんて出来っこないけど。けれどもう、どうする事も出来ないじゃないか。

ああ、ごめんな、遥香。やっぱり俺は、お前を助けられないよ。

引き伸ばされた一瞬。僅かの時が、その何倍にも感じられる。俺という存在が終わる、そんな瞬間に――

「ああ、いたいた。探したぞ、つたく」

——場の空気とか何もかもをぶち壊して、さっきの男が現れた。

六つの剣と契約の悪魔／空白の自分

鰐文久遠は混乱していた。黒い犬の形をした化物に、不可思議な剣……おかしい事ばかりが起こる夜の、その最大の怪異。

その男は、完全に完璧に場違いな存在であつた。

明らかに非日常ヘカテゴライズされる犬や剣とは異なり、その男には何の異常も見当たらない。言うならばソレは久遠と同じ、日常の……表側の存在である。

超常のまかり通るこの夜において、怪異とは無縁の存在が……何故逃げもせず自分たちを探していたのだろう。

ともすればソレは命を捨てるのにも等しい行為である。抗う術を持たぬ昼の住人は、夜の住人と関わってはいけない。昼の住人である久遠は、黒の猟犬と対峙する事でソレを体感した。

にも関わらず、男は夜の世界を平気で歩いてきたらしい。其処にこそ、久遠はある種の不可解さを感じていた。

常人とは異なる思考回路を持っているのか、或いは単に気が触れているのか……。

ぐるぐるする頭で必死に考えたが、何一つ答えらしきものは得られない。

同じ頃、邑森遥香も考えていた。

彼女が呼び出そうとしたモノとはまったく異なる形をした、ソレ。どうみてもただの人間にしか見えぬ男はしかし、何故か五体満足のままこの場に現れた。

黒の猟犬の餌食になっけていてもおかしくは無い先ほどのシチュエーションで、である。

もしかすると……否、ありえない。自問自答する。彼女の目論みは、失敗したのである。光り輝く魔方陣から、呼び出した覚えのないモノが現れた時点でソレは決定的であつたのだ。

だがしかし……そうでないとすれば、男が此処に居る理由が思い浮かばない。

確かに有り得ない事ではあるが、けれどそうでもなければ男が生きている筈はないのだ。

そうして彼女の思考が結論へと達する、僅か手前。硬直していた場の空気が氷解した。

久遠の上に鎮座していた黒の猟犬が、その身をぐつと低くする。

男の出現でお預けを喰らっていた犬は、待ちきれぬとばかりに双眸を爛と輝かせた。

やられる。身を強張らせた久遠が見た光景は、けれど自身へと迫る牙ではなく……疾風の様に男へと飛び掛る獣の後姿である。

犬が男へと飛び掛つた理由に青年が気付いたのは、ソレが地面へ

と墜落して僅かな時が過ぎ去ってからであつた。

目標変更の理由は、恐れである。つまるところその男を排除しなければ自分の存在が危ういと黒犬はそう判断——あるいは直感——し、目の前の久遠ではなく、男へと飛び掛つていったのだ。

「な、んだ……？」

ボトボトと音を立てて、細やかに分断された肉片が地面へと落下する。見る影も無い程にバラバラにされたソレは、男へ向かつて突進した猟犬の成れの果てだ。

「——賤のなっていない犬だな、しかし」

まるで何も起こつて無いみたいに、男はそう呟いた。

否、確かに何も起こつてはいないのである。黒の猟犬が飛び上がった時、男はただ棒の様に立っただけなのだ。

にも関わらず、猟犬はバラバラの肉片と化し、地面の上にばら撒かれた。その事実には久遠は戦慄した。

この男も、黒犬と同じ夜の存在だったのだ。そうでなければ、今の現象に説明がつかない。手も触れずに物体を切断するなんて、そんな現象が起こる筈はない。

久遠は男から視線を外さぬよう注意した。必要があればすぐに剣を振り上げられるように右腕に力を込めて、男の出方を窺う。

得体の知れぬこの男が、突然襲ってこないと、とてもじゃないが言い切れない。油断をしたら、殺されるかもしれないのだ。

だが、そんな久遠の予想とは裏腹に、男は至極困った様な表情を浮かべて言った。

「なあ、ちょっと聞きたいんだけどさ」

よほど尋ね辛い事なのか男はキョロキョロと辺りを見回し、他に人が居ない事を確認してから続きを口にした。

「俺って——誰なの？」

「は？」

予想だにしなかったその発言に、久遠は思わず声を上げた。

今、コイツは何を言ったんだ。男の台詞を何度も反芻する。けれど、久遠にはその言葉の意味するところが理解できなかった。

「そっちのお嬢ちゃんは？」

遥香へと向き直り、先ほどの問いを繰り返す男。

複雑な……数種の感情の入り混じった様な表情を浮かべると、遥香はすうと息を吸い込んだ。

そして僅かに口を開くと、ぼそぼそと何事かを呟いた。

「ん？」

あまりにか細いその声を聞き取る事が出来ず、男はそう聞き返す。

酷く疲れた様子の遥香は、もう一度息を吸い込んで、搾り出す様に言った。

「あり、えない」

前後の文脈を無視した、質問への回答とも思えないその一言を発すると、遥香の体がグラリと揺れた。

直後、まるで糸の切れた人形みたいに、遥香はドサリと地面に伏した。

布団に寝かせた遥香の顔をしげしげと見つめ、ソレから男はポツリと言った。

「問題はなさそうだな。単に眠っているだけかと」

倒れ伏した遥香を背負って家まで歩いた俺は、肩で息をしながらソレを聞いた。

「ほ、本当、だろうな……」

荒い呼吸をしながらそう言うと、男は「嘘など吐かないさ」と返した。

怪しい……。というか、そもそもコイツ、自分の事すら解らないんじゃないかったのか？

先ほど男が放った台詞を思い出す。嘘を吐いている様には見えな
いが……まるつきり信用できるかと問われれば、首を傾げるだろう。

「——で。俺は何でこんな所に居るんだ？」

「知るかよ、勝手に着いて来たんだろ」

ああもつ、なんだコイツは。人が真剣に考えてるっていうのに！

「……はあ。とりあえず、ちょっとこつち」

色々と聞きたい事があるので、お勝手へと移動する事にした。

男は無言のまま俺に着いて来る。やけに素直だ、一体何を企んでいるのだろつ。

ガラガラと引き戸を開けて、洋室へ男を入れる。

中央にあるテーブルに向かい合わせで座ると、俺は男をじろりと見据えた。

とりあえず、外見に変な箇所は無い。どう見たって日本人の（どこらかといえば色男に分類される）顔をしているし、筋肉質な体つきは格闘家よりもスポーツマンといった風で、がっしりとはしているものの、無骨さや角ばった感じはない。いたって平凡なモノである。

特に手を入れていないのであろう髪の毛は、伸びるに任せてややボサボサではあるが、不潔感は一切無い。

自身を凝視する視線を特に嫌がるワケでもなく、男はただボケツと明後日の方向を眺めていた。

「……」

「怪しい所はなかったかい？」

一通りの観察を終えた俺に向かって、男はしれっとそう言った。

「無い……けど。解つてて、黙って見られてたのか」

「ま、君からすれば俺は不審者と真ん中だろうからね」

俺の態度は、初対面という点を差し引いてもかなり失礼なモノであつた筈だ。にも関わらず、目の前の男はソレを笑って許容した。むしろソレは自然であると。

たつたソレだけの事で、俺は目の前の男が「信用に足る人物」であると確信した。

無論、そこまで計算の上での芝居。という可能性も無くはない。無いはないのだが……この男がそんな事をするとは、とてもじゃないが思えない。

そこまで考えて、俺はふっと口元を緩めた。

大丈夫、この確信は正しいモノだ。どこからともなく沸き出でた

自信が、俺の思考を後押しする。

そうして俺は、男に向けて名前を名乗った。そうする事が、先ほどの非礼を詫びる最善手の様な気がしたからだ。

「俺は鰐文久遠。歳は十七で、その高校に通ってる。血液型はB型、趣味は模型作り……他に聞きたい事は？」

そこまで一気に言うと、男は僅かに驚きの色を浮かべ、ソレから小さく笑って答えた。

「自己紹介ありがとう。まったく、名乗り返せないのが残念だよ」

おどける様にそう言って、男は肩を竦めた。

「本当に、解らないのか？ その……自分の名前すら」

散々男が訴えてきたソレに、俺はようやく真正面から取り合う事にした。男の立場に立ってみれば、何を今更と思われるかもしれないが、こっちにしたりっていきなり妙な化物に襲われているのである。その上で得体の知れない不審者まで現れたのであるからソレに対し警戒心を抱くのは当然と言えば当然で。まして、その言動を信じるなんてもってのほかなのだ。

「解らないのか、忘れているのか……なんとも説明しづらいな。抜け落ちている、というのが最も近いかもしれない。俺という個人に関する情報だけ、まるで引き抜かれたみたいに、ぽっかりと消え去っている感じ？」

「感じ？　って言われてもなあ。うーん……」

個人に関する情報だけ消え去っている、か。なるほど、だからコイツは遥香の様子を見て「問題ない」と判断したり、そもそも外見年齢と合致するレベルでの受け答えが出来るのだ。

「じゃあ逆にどこまでの事を覚えているんだ？　出身地とか、知り合いの名前とかは」

とにかく情報が少なすぎる。話をしている内に何か解るかもしれないし、とにかく何かしら会話をしよう。

「出身地、か。むむ……む」

頭に手を当てて必死に思い出そうとしている男。見ているこっちも力が入ってしまうくらいに真剣な様子だ。

そりゃそうか。自分の事が解らないって、ソレは凄く不安な事だ

よな。

自分が誰かも解らずに、突然あんな所に独りぼっちにされて……
すぎる思いで俺たちを追って来て、ソレでこんな扱いされてるんだ。

「知るかよ、勝手に着いて来たんだろ」先ほど放った言葉。俺は
ソレを思い出して、ゾツと背筋が震えるのを感じた。何て、無責任
な台詞なんだろう。

あまりに冷たい。残酷な一言。自分ばかりが真剣なつもりで、
俺は……。

「あ、その――」

さっきは、ごめん。そう口にしようとした瞬間、洋室の引き戸が
ゆっくりと開け放たれた。

俺は顔をふっと上げ、男はぐるりと振り返って……戸の向こうに
視線を向ける。

薄暗い廊下には、神妙な表情を浮かべた遥香が立っていた。

六つの剣と契約の悪魔／遥香のお話し（上）

「遥香！」

もう大丈夫なのか？　そう聞くよりも早く、遥香が口を開く。

「やっぱり……夢じゃなかったんだね」

ぼそりと、独り言みたいに紡がれた言葉。意図するところは解らなかったけれど、その口調がいつも通りだった事に、俺はほっと胸を撫で下ろした。

それから遥香はゆったりとテーブルを半周し、俺の隣の席に座った。

「……ごめんね」

「え？」

それは誰に向けた言葉であつたのだろうか。申し訳無さそうに言つた彼女は、顔を伏せて静かに息を吸い込んだ。

聞きたい事は色々ある。けれど俺はソレをぐっと飲み込んで、遥

香の言葉を待つ事にした。急かすのは、何だかいけない事のような気がしたのだ。多分、俺よりももっと聞きたい事があるであろうアイツも、同じ事を思っている。

だから部屋は静まり返り、ただ三人の呼吸の音だけが静々と空気を振るわせた。

多分、一分すら経過していないだろう。遥香が部屋に来て、ただ沈黙だけの時間。一分未満のソレは何故か、俺にはとてもとても永く感じられた。

そうして、さらに一分程の沈黙を経て、その沈黙は破られる。

「……あ、あの」

おずおずと顔を上げた遥香。空気の重さに当てられたのか、少しだけ涙ぐんでいた。

「な、何から話せば良いんだろ……あの、その……」

口を開いたは良いが、イマイチ頭の中がまとまらなかったんだろ。あーとかうーとか必死に考えているらしいが……ハッキリ言ってちょっと見るに耐えない。コイツがこういう状況に弱い事を誰よりも知っている俺は、だから助け舟を出してやることにした。

「落ち着け遥香……ちょっと深呼吸しろ」

「え、え？ あ……うん。すーはー」

別に「すーはー」は口に出す必要ねーぞ、と突っ込もうとして止めた。頭がこんがらがってて、多分自分で何言ってるか良く解っていないだろうから。

「……で、頭はすっきりしたか？」

「あ、うんうん！ すっきりした！」

よし、これで大丈夫だろう。俺は再び口をつぐみ、遥香の言葉に耳を傾ける。

が、遥香は未だに何かを考えているようで、一向に口を開こうとしない。

うーん、どうすっかなあ。何て考えていると、今までじっと押し黙っていた男が唐突に言葉を発した。

「思考がまとまらないのなら、こちらからの質問形式にさせてもらうのはどうだろう。そうすればアレコレ悩まずに済むと思うが……」

このままでは埒が明かないしな。そう続けた男に、遥香は小さく頷いて返した。

「その方が良いかも……なんか、ごめんね」

「気にすんなよ。んでアンタ、俺より先に聞きたい事あるだろう？」

そう男に問いかける。多分、アイツが一番に質問する権利を持っていると、俺はそう思ったからだ。

「む、すまん。では、繰り返しになるが質問させてもらう……俺は、一体誰なんだ？　なんでこんな所にいる？」

真剣な眼差し。遥香は自分に向けられた視線をしっかりと受け止めると、もう一度深呼吸をして、言った。

「最初の質問には……ごめんなさい、答えられないの。というか……その……」

私も、解らないの。続きは殆ど聞き取れないくらいに小さく、か細く紡がれた。

言い終わるや否や、遥香は顔を下に向けると、右手で前髪をくるくると弄び始めた。恥ずかしがっている時の、昔からの癖だ。

って、何でこのタイミングで恥ずかしがるんだ？

イマイチ釈然としないが話しの腰を折るのも何なので、俺は成り行きを見守る事にする。

「……そうか」

声こそ冷静なもの、男の落胆は痛いくらいに伝わってきた。

「それで、二番目の質問なんだけど………うう」

両手を顔に当て、赤い顔を必死に隠しながら遥香は話しを続けた。

「……間違えて……召喚……しちゃった……」

断片的に発せられた台詞。ソレを最後まで聞いて、俺は首を捻った。

何だ、この違和感。えーッと確か、アイツの二番目の質問は「なんでアイツが此处にいるのか」で、それに対する遥香の答えが「間違えて」「しょーかん」「しっちゃった」？

なんだ、なんで俺は理解できない？ あ、英語？ S Y O - K A
N……って単語の意味は何だっけ？

「原因は良く、解らないんですけど……回線の不都合があったらしくって……呼び出してみたら何故かアナタが……」

「召喚失敗によるショックが記憶喪失の原因ってとこかな……それにしちゃあ、いやに喪失部分が限定的な気もするが」

が、話しについていけないのはどうやら俺だけのようで。二人のキャッチボールは着々と進められている。

「や、その……記憶は私のせいかも。使役する理由的に、個人的なモノは全部置いて来るって設定にしたので」

「そりゃあまた随分思い切った事を……ちなみに契約相手は？」

「コレと言った対象は……ただ、この辺りで一番強力な悪魔を」

「は？」

思わず、素っ頓狂な声を上げてしまふ。遥香の口からするりと、極々自然に零れ出た単語があまりにも唐突すぎて、成り行きを見守るとか言ってた俺がどこかにぶっ飛ばされてしまった。

「悪魔って、あの悪魔？　ってことは『SYO・KAN』は召喚！？」

そーいや、さっきの犬も悪魔だっつってたっけ？　俺はあの時の、ちよっと様子の違う遥香を思い出す。

「うん。ごめんね、くーちゃん」

話しの腰をボツキリ折った俺へ文句ひとつ無く、しおらしく言う遥香。くそっ。そんな態度されたら、もしかしたら夢かドッキリだろう、なんて考えが馬鹿らしくなっちまうじゃねーか。

「……ここは謝るとこじゃないだろ」

とりあえずそう言うのが精一杯な俺に対し、遥香は首を横に振って答えた。

「ううん、ここは謝るとこだよ。ごめんね、今まで内緒にしてて」

「ない、しょ？」

馬鹿みたいにオウム返しする俺。遥香は寂しそうに笑って、それからハッキリと言った。

「うん。実は私ね……魔術師なの」

今度こそ本当に、俺の中の何かが吹き飛んだ。

フィクションの中でしか聞いた事のない、その言葉。漫画やゲームや小説の中の住人。よりによって、遥香が『ソレ』だなんて……冗談にも程がある。

全部を夢だった事にして、さっさと布団に潜りたい衝動を抑え……俺は遥香の目をじっと見た。

本当はそんな事しなくたって、俺にはコイツが嘘を吐いていないって解るけれど……こんな時に嘘を吐く奴じゃないって知ってるけれど……そうでもないかと、俺が今まで積み上げてきた常識って奴が、簡単にソレを受け入れてはくれなかったのだ。

そうして俺を見つめ返す瞳は、やっぱりいつもの遥香のモノで……だから俺は、ふうと溜息を吐いて、言う。

「んで、じゃあなんでお前はその召喚？　だかなんだかをやったん

だ？」

「え、えーっと……一言で説明すると、『私の代わり』をお願いする為って事になるのかなあ……」

ゆっくりとした調子で話す遥香。俺たちが聞き取り易いようにという配慮からか、それとも、考えをまとめながら口を動かしているからなのか……恐らく、両方だろう。遥香は身振り手振りも交えつつ話しを続ける。

「ちょっと説明が長くなっちゃうんだけど……私の代わりってというのは、代理の村守……凶祓いの事で……」

ぼつりぼつりと語られていく、遥香の『秘密』。十七年という時間を共有した俺ですら知らない、遥香の背中にあるモノ。その全貌が、少しずつ姿を現していく。

「私の家はね、代々この辺りを靈的に守る、凶祓いっていう役目を持っているの。あ、といっても普段は何か特別な事はしないんだよ？ 年に一回のお祭に、来賓としてちょっと顔を出す程度かなあ……うん。でもね」

一旦間を置く。多分、遥香も緊張しているのだろう。俺が遥香の知らなかった一面を知るという事は、遥香も教えなかった自分の側

面を教えているという事なのだから。

「何年か……何十年かに一度、向こう側との境界が曖昧になる時期があるの」

向こう側？ 俺が首を傾げると、隣に座っていた男が答えた。

「星幽界、アストラル界、異世界、魔界、精霊界、天界、星の記憶等と呼ばれる場所。或いは単にあの世って方が解り易いかな。それぞれが指す意味は微妙に異なるんだけどね、大体の雰囲気は解るだら？」

「此処ではない何処か、ってワケか」

言って頷くと、ソレを見た遥香が更に続きを話す。

「……そんな時期はね、向こう側から零れ出した怪異が、誰の力も無しでこっち側に顕現するの。さっきのわんちゃんがまさにソレなんだけど……」

俺たちを襲った、黒い獵犬。今の話を聞いてようやく、遥香がアイツを「悪魔」と呼んだ理由を理解した。

「そういった、零れ出した怪異を鎮め祓うのが私たち凶祓いの本当の仕事」

なるほど。つまり遥香の家は……化物退治を生業とする一族だったってワケか。

「ん、何かおかしくねーか？ お前の家系がその、凶祓い……って事は、つまり親父さんかお袋さんもソレなんだろ？ 街に化物が出てくる時期には帰ってくるんじゃないのか」

単身赴任を繰り返し、何年かに一度しか帰ってこない遥香の親父さんと、去年の夏、海外出張でイギリスへ行ってしまったお袋さんの顔を思い浮かべ、俺はそう尋ねた。

「うん、本来ならそうなるんだけど、今回はちょっと特殊なケースなの。後数年は安定期の筈だったんだけどね、近くで大規模な魔術行使が行われたらしくって……境界が無理矢理捻じ曲げられちゃったみたい」

うんうんと首を縦に振ってから、男が口を開く。

「成る程、事の経緯は理解した……で、その凶祓いの為に何故君は召喚術を使っただ？ 見たところ召喚術士には見えない……^{サモナー}とい

うか……うん？ うん？ 君はそもそも魔術師なのか？」

遥香を上から下まで眺め回しながら、男は頭を捻った。

困り顔の遥香は、やや早口に言う。

「そ、そこが重要な所なんだけど……あ、あのつ、あんまりじろじろ見ないでえ」

「んあ？ ああ、こりゃ失礼」

言われてようやく気付いたのか、男は視線を正す。状況が状況じやなきや、俺が引つ叩いてたところだ。

再び赤くなった顔を誤魔化すように席を立った遥香は、「お茶、淹れるね」と三人分の湯呑みを戸棚から取り出した。

ポットに残ったお湯でちょうど三人分のお茶を淹れて、遥香はまた俺たちの正面に座る。

そうして熱いお茶を一口啜り、遥香は『重要な所』を話し出した。

六つの剣と契約の悪魔／遥香のお話し（上）（後書き）

前回からだいぶ間があいてしまいました。お待ちくださっていた方、真に申し訳ありません。正月気分が抜けない作者の、不徳のいたすところでありました。そろそろ通常運行に戻る筈ですので……本当にすいません。

ご意見・ご感想ありましたら是非是非、よろしくお願いいたします
それではっ

六つの剣と契約の悪魔／遥香のお話し（下）

「ん、んー……ごほんごほん。えーっと……」

わざとらしい咳払い。どうやら遥香の言う『重要』とは『話し辛い』という意味合いも持っているようだ。

幾許かの時間を置いてようやく覚悟を決めたようで、遥香は咳払いを止めて口を開いた。

「実は……そのお……私、魔術が使えないの……」

もによもによと言いつつ放たれた言葉。若干聞き取りづかったものの、音として俺に届いたソレを俺フィルターにかけて解読する。古い付き合い故の離れ業といえるだろう。

「……って、はあ？ お前、言ってる事が矛盾してるぞ。現にその魔術を使つて、この人を呼び出したんだろう？ だってのに、魔術が使えないって……」

「私がやった召喚は、普通の魔術じゃないの。予め呪文として完成しているモノに魔力を通しただけ……術式って言うんだけど。コレなら門のない人でも、魔力さえあれば魔術を行使できる」

ポンポンと飛び出す、オカルティックな専門用語。と、隣で黙って聞いていた男が、その口を開いた。予備知識のない俺に説明してくれるらしい。気を利かせてくれたのだ。

「術式は、例えるならカップラーメンってとこかな。魔力……お湯さえあれば、誰でも簡単に食べられる。無論、予め作られた麺と具とスープを食べる事になるけどね。対して、一般的な魔術師は老舗ラーメン屋の店主だ。代々続くレシピ通りに、忠実に味を再現し、時にはアレンジを加えてラーメンを作る」

ごく稀に、まったく新しいレシピを創り出す奴もいるが……まあその話は置いておこうか。何やら意味ありげな台詞を付け足して、男の説明は終わった。

「成る程ね。確かに遥香じゃ、作れてもカップラーメン止まりだな」

いつもの調子でからかってみる。我ながら空気をぶつちぎった発言だが、そうでもないとその重たい空気に潰されてしまう感じがしたのだ。

事実、邑森家のお勝手は、ここ数年で最も重たい雰囲気包まれている。

そんな俺の心情を知ってか知らずか、心なしか明るい口調で男が言った。

「まあグダグダ言ってもしょうがないしな。契約を履行しない限り、俺に自由は無いわけだし……ってワケで、俺は何をすれば良いんだい？ 話を聞く限りじゃ、怪異の沈静化ってトコかな」

湯呑みの中に視線をやりながら……茶柱でも探しているのだろうか……遥香に問いかける男。対して遥香は、首を縦に振ってから答えた。

「うん……半分は、ソレをお願いする事になります」

……ん？ 半分？

俺と男は、同時に首を捻る。遥香は自分の代わり……街を化物から護る『凶祓い』の代理……として男を呼び出したのだから、彼の仕事は『街を化物から護る』事なワケで。もう半分とは、一体なんなのだろう。

「もう半分は……くーちゃんを……護って欲しいんです」

「……俺？」

どういう意味だ。俺を護って欲しい、とは。腕を組んで考えるも、

遥香の言った言葉の意味が解らない、解れない。

そんな俺などお構いなしに、遥香は話しを続ける。

否、違う。本当は『お構いなし』なんかじゃない。矢継ぎ早に言わないと、きつと言葉が出なくなってしまうのだ。その事実を聞いた俺は、そう考えた。遥香の言葉はそれほどに、俺にとって不可解で、理不尽なモノだったのだから。

「くーちゃんは……ただ其処にいてだけで『魔』を惹き付けてしまふ体質なの。くーちゃんの望むと望まないと関わらず」

視線を逸らし、早口に言う遥香。その声はとても辛そうで……一言、言葉を発するたびに、自分自身を傷つけている様な……俺にはソレが、悲痛な『叫び』に聞こえた。

「ソレは……昔から、そうなのかい？」

「……………」

沈黙。何故だか、遥香は口を閉じた。

ああ、此処が話しの核心か。俺はそう確信する。

何か言葉を発するべきか……そう思うものの、何を言って良いの

か解らない。男も口を噤んでいる。お勝手は、とても静かだ。

ちらりと視線を遥香に送る。気にしないで言ってみるよ。昔からのアイコンタクト。こくり、遥香は首を縦に振る。

そうして……ふうと息を吸い込んで、意を決した様に遥香が言った。

「くーちゃんが魔を惹きつける原因、ソレは……」

言葉を区切る。続きは何だ。中断がもどかしい。

もう一度遥香と視線を合わせる。瞬間、遥香の頭がグラリと揺れた。

「ん……っ」

「はるっ」

まるで気を失ったみたいに、前のめりに倒れこむ遥香。思わず声を上げそうになる俺を制止したのは、テーブルに頭をぶつけるギリギリで踏みとどまった遥香自身であった。

右腕を挙げ、大丈夫だとアピールする。飛び出しそうな言葉を飲み込んで、俺は遥香の様子を窺った。

「……ふう。ごめんなさい…… 此处からは私が説明するわ」

大きく息を吐き出して、遥香は、おおよそ遥香らしく無い口調でそう言った。それは先程、黒の獵犬と対峙した時の遥香の言葉遣い。普段の彼女よりも、鋭い言葉。

「……誰だ」

そんな台詞が口をついて、俺は自分の発言に驚いた。目の前にいるのは紛れもなく、邑森遥香その人である。十七年間共に生きてきた、間違いのような無い少女。その遥香に向かって、俺は「誰だ」とそう言ったのだ。これは一体どういう事か。

或いは、何か得体の知れない違和感…… 不可思議な差異が、俺にその言葉を発せさせたのだろうか。

そんな俺の考えを肯定する様に、遥香はふつと微笑した。俺が初めて見る笑い方だった。

「……刹那。遥香からはそう呼ばれているわ」

「……二重人格という奴か？」

興味深そうに、刹那……と名乗った遥香に問いかける男。

どこか冷たさを感じさせる微笑みを浮かべ、見慣れていた筈の少女は、肩を竦めて答えた。

「意図的に作られた人格、だけれどね」

あの子は凶被いには向いていないから……。遥香を指してそう言う、刹那と名乗った彼女。

「私とあの子の説明は追々するとして、今は久遠の『体質』について話しておくわ」

俺を呼び捨てる遥香。なんて奇妙な光景だろう。まるで自分が別のセカイに迷い込んだ様な、今までの常識が壊れていく様な錯覚。

いや、ソレは錯覚ではない。間違いなく俺の常識は、日常は、この夜を堺に一変したのだから。

「魔を惹きつけるとは文字通り魔的なモノ、悪魔や怪物に狙われ易くなるという意味よ。例えるなら久遠は一種の誘蛾灯みたいなモノね。そしてその原因は、あなたの体に刻まれた術式にある」

「俺の、体に……？」

確か、術式つてのは……さっきの説明にも出てきた、魔術の一種だっけか。ソレが、俺の体に刻まれてる？

「そう、久遠の体にはある特殊な術式が刻印されている。ソレこそが、怪異を惹きつけるモノの正体」

「ちょ、ちょっと待てよ。術式……って、一体誰がそんな事を？いや、そもそもいつの間に？」

その話しが本当だとしたら、俺は今までも怪異を惹きつけていたワケなんだろう？ だけど、実際に襲われたのは今日が初めてだ。

「術式を刻印したのは、あなたの両親よ」

「な」

そんな馬鹿なと続けるよりも早く、刹那が口を動かした。

「だから遥香は言い渋ったの。それに、久遠の両親の願いでもあったから……自分たちが魔術師であるって、実の息子であるアナタに

隠しておく事」

一気に言って、刹那はずっとお茶を飲み干した。

今度こそ俺は完全に混乱した。まさか自分の両親までもが、魔術師だったなんて……そんな馬鹿な事があるか。

「出来れば久遠には、普通の人として生きて欲しい……あなたのお父様とお母様は、常々そうおっしゃっていたわ。事実、この年になるまで久遠はごく普通の生活を送っていたでしょう？」

どこか諭すように、刹那は言う。

だが俺は、簡単には納得できなかった。何故、俺には秘密にしておいて、遥香にソレを教える？ その理由が解らない。

「それはね、あなたのご両親が……いえ、あなたの遠い遠い祖先の誰かが、自らの求める魔術の研究と研鑽を止めてしまったから……或いは、完成させてしまったから」

だから、自らの弟子にソレを口伝する必要はない。ただ、呪いの様に姿を変え、後世に伝えられれば良い。刹那は話を続ける。

「後継者が死亡した時に、次の後継者へと自動で引き継がれる術式

……最も、術者が自ら望まぬ限りソレは機能を停止したまま。だから一生涯、自分が術式の後継者であると気付かぬモノもいる……」

でも、私は……私たちは違う。

少しだけ寂しそうな声。ソレは、刹那よりも遥香に近い感情なんだと、なぜか俺はそう感じた。

「凶被いは、後継者を育てなければいけない。私たちは、生まれた時から魔術のセカイにいた……ソレは違えられぬ運命。だから久遠のご両親は、最悪の事態に備えて、私にだけ術式の事を教えてくれた。『虫の良い話だと笑ってくれ』って、そう言って教えてくれた……」

「……なんだよ、ソレ」

イライラする。

そりゃあ父さんも母さんも、俺の事を考えて黙っていたんだろう。でも、そのおかげで遥香は、別に背負わなくても良いモノを背負わされていたんだ。

「……教えてくれよ、は……刹那。俺にその、魔術の事を」

「勿論、言われなくてもそのつもりだったわ……久遠、アナタはもう、無関係ではいられないのだから」

ボーン、ボーン。奥の客間から響く、柱時計の鐘。時を告げる、無機質な音色。

そう、ソレは宣告だ。俺が昼の住人でいられた、最後の夜の宣告。

そうして鰐文久遠は、たった今から、夜の住人となった。

魔術師と呼ばれるモノ達の、一員となったのだ。

忘却校舎／断罪すべき七つの大剣

「——っ、は——」

目を開けた。同時に感じる眩しさに、俺はたじろぐ。朝の柔らかな陽射しでさえ、長時間閉じていた眼には強烈だ。

一分、二分……明るさに目が慣れるまで、何も考えずにいた。

「……はぁー……夢か」

そうして緩やかに飛び出た台詞がソレだった。

完全に開けた視界に映るのは、何の変哲もない自室。

当然だ。だって俺はごく普通の高校生で、単調でつまらない毎日
は変わる事無く流れているのだから。

そう、だからアレは夢だったのだ。退屈な日常を彩る、ちょっと
だけスリリングな俺の妄想。

目を開ければ簡単に消えてしまう、泡沫の空想。

俺の思考を肯定する、ドアノブの乾いた音。……遥香だろう。

ギィと音を立てて開いたドアの向こう——

「おはようさん。さ、今日からさっそく特訓といこうか！」

——つて、ええええええ？

妙に爽やかな笑顔で現れた男が、俺のモノローグを容赦なく打ち砕く。

「うん？ 呆けた顔をして、一体どうしたんだい」

「……や、なんでもない」

冷静になると同時に蘇る、昨夜の記憶。

俺の体に刻まれた、ある術式の話し。

……

「断罪すべき七つの大剣——ソレが、あなたに宿る術式の名前よ」
セブンスグリモワール

凜とした、遥香らしからぬ声——事実、目の前の人物は遥香で

あつて遥香でないのだ——が、静かなお勝手に響く。

眼差しは真摯に、彼女の意味を表している。

だから俺もソレを聞き逃さぬ様、心を声に傾ける。

「グリモアという呼び名が示すとおり、その正体は剣のカタチをした七つの魔導書……人の原罪、七つの悪性を書き記した、強力な術式」

七、剣。そのキーワードが指し示すモノ。

俺の脳裏に浮かんだのは、夢の中に現れた七つの巨大な剣。獵犬から俺を救った、あの剣だった。

「その呪文書を解読すれば、絶対的な正義の基準を知る事が出来ると言われている……最も、私たちには必要の無いモノだけど」

第一、あんな古代の文字を読み解くには、それこそ気の遠くなる程の時間がかかるもの。刹那は小さく微笑んで、そう結んだ。

と、男が刹那の言葉を補足する様に言った。

「問題は呪文書の中身ではなく、ソレを持っている事で、久遠、に危害が及ぶって事だろう？」

俺の名前だけやけにぎこちないが、まあ知らない人間の名前を初めて呼ぶ時なんて大抵そんなもんだろう。いらんツツコミで話しの腰を折るのもなんなので、仕切りなおすつもりで俺は口を開く。

「まあ俺が狙われるってのは解ったよ。んでもそのなんちゃらってのは剣のカタチをしているんだろ？ ソレ使って返り討ちに出来ねーのか？」

が、どうやらソレは失言だったようだ。

じろりと俺を一瞥した刹那は、トゲのある口調で返答した。

「勿論、出来なくは無いけれど……ソレは並大抵の事じゃないわよ？ 黒の獵犬と対峙して、どうだったの？」

「そ、ソレは……」

「キツイ言い方で申し訳ないけれど、素人考えでどうこう出来ると思わないで欲しいわね」

凶星、あまりにも痛い所を突かれて、俺は何も言い返す事が出来ない。その憤りが充分に理解できるモノである事も、ソレに拍車を

かけた。

ついさっき魔術の存在を知った人間が、ほいほい口にい言葉じゃなかった。刹那にしてみれば、まさしく「素人考え」なのであろう。

「……悪い、お前の言う通りだよ」

素直に頭を下げる。

と、その反応が意外だったのか、毒気を抜かれた様子の刹那は語感を弱めて還した。

「わ、解ってくれて何よりだわ、」

「けどな、やっぱり大人しく守られてるだけってのは納得できねえんだよ」

ああ、そうだ。いくら俺の考えが甘つちよろくて、魔術のセカイでは通用しないからといって……じゃあお願いしますって遥香達に任せて、一人安穩と暮らさせてか？

そんな事が出来る程、俺は要領良くも、物解り良くもない。

「納得出来るとか、出来ないって問題じゃないのよ？ 私は、久遠では無理だって言ってるの」

「無理かどうかって問題でもねえだろ！ やるか、やらないかだ」

これに関して、譲るつもりはない。恐らく刹那もそうだろう。

俺達の考えの奥底は、多分真反対で。俺は遥香を守りたくて、遥香（今は刹那か）は俺を傷つけたくなくて……きっと、だからすれ違う。

自惚れた考えだけど、何となく解ってしまふ。きっとこれも、俺たちが幼馴染だからだろうか。

平行線のやりとり。そんな場を収めるには、第三者の介入が必要不可欠で。ソレを知ってか知らずか、俺達の間にも男が割って入ってきた。

「ふむ、二人の言い分は解った。そして……その解決法も思いついた」

自信満々といった態度でそう言う男。解決法とは、一体どういう事だろう。

俺と刹那は息を吞んで続きを待った。

男はニヤリと口元を歪めてから、話し出す。

「ズバリ、特訓だな」

「特訓——？」

俺と刹那の声が重なる。男は構わず続けた。

「四六時中俺が久遠に張り付くワケにもいかなだろうし、最低限自衛出来るに越した事はない。それにさっきお嬢ちゃんが言ったんだろう？ もう無関係ではいられないって」

もつともな事を言われ、刹那は渋々ながらも首を縦に振る。

「なに、大丈夫さ。俺が指導するんだから、少なくとも化物相手に生きて帰ってこれる程度には鍛えてみせる」

発言だけを聞けば自信家のソレだが、男の実力を目の前で見ている俺にはむしろ頼もしく感じられた。

いや……正確には、見る事すら出来なかった訳だけど。

「って事で、早速明日の朝から始めようか。早い方が良さだろう？」

ビシッとそう言う男。何だか流れるように仕切られてしまったが、俺としては男の申し出はむしろありがたいので、黙って従う事にする。

刹那も一応、納得（というよりも譲歩か）してくれたらしく、何かしらを口にする事はない。

場が落ち着いた事に満足したのか、男はゆっくりと椅子から立ち上がり、それから言った。

「さて、ソレじゃあ今日はお開きにしようか。特にお嬢ちゃんは無理しない方が良く。召喚による消耗は、通常の魔術よりも遥かに大きいぜ」

「あ……あ、そうね。そうするわ」

流石の刹那も面食らったのか、歯切れの悪い返事を返した。

「っと、ソレから……」

引き戸の前で立ち止まった男は突然振り返り、思い出したかの様に付け足した。

「名前、というか呼び名なんだけれど……流石に名無しじゃ不便だろう？　それで、ずっと考えていたんだけれど……俺の事は——ニヒト、と呼んでくれ」

「——え？」

再び重なる声。多分、今度は同じ意味で。

どうやらよほど自信が有るのか、呼び名について、男は少々得意げに説明する。

「いや、元々お嬢ちゃんは悪魔と契約するつもりだったんだよね、確か。悪魔っていうのは常に否定する霊なワケだから、ドイツ語で否定を意味するニヒト……っていう感じで。うん、我ながらナイスな思いつき」

うんうんと頷く男。シリアスな空気があっという間に氷解した事など最早どうでも良くて、俺は気になったソレについて尋ねる。

「えーっと、何でドイツ語なんだ？」

と、男は、何故だか意外そうな顔をして答えた。

「――？ カッコいいからだろう？」

当然だろうと言わんばかりの勢いだ。彼の境遇には同情するが、あまりにもポジティブすぎて正直複雑な心境になった。

男……ニヒトは、俺と刹那に自らの呼び名を確認すると、今度は背中を向けて引き戸を開ける。

そうして廊下へと一步を踏み出すと、向こうを向いたまま言った。

「それで、俺はどこで寝れば良いんだ？」

俺と刹那は、同時に溜息を吐いた。

……

一頻り昨晚の事を回想し、俺はようやく男の言った「特訓」の意味を理解した。

「場所は、裏庭……で良いかな。表はあんまり広くないし」

運動靴に履き替え、男の後に着いて来た俺。少し頑張れば山に侵

入できる邑森家の裏庭はそこその広さを誇っており、ちょっとした運動なら問題なく出来るであろう。

とりあえず最初は準備運動かな、なんて考えていた俺の背後に、隠しているようで隠しきれしていない気配が近づいてくる。今度こそ間違いなく遥香だろう。

「くーちゃん……」

「よ、おはようさん」

いつも通りの口調。正真正銘の遥香である。その表情が、いつものソレとは異なりいくぶん暗い事を除いて、であるが。

そりゃそうだな。なんだか気の強そうな刹那だって、俺がこういう事を積極的にやるのには反対してたんだ。まして遥香は人一倍、他人の事ばかり気にする奴なんだから。

……今気付いたが、刹那の時の記憶を遥香は持っているのだろうか。いや、持っているからこそ、今こんな顔をしているのだろう。俺は勝手に決め付けた。というか、思考が中断されたのである。原因は、遥香の手に握られた素敵アイテム。

「……竹刀なんてウチにあったのか」

毎日毎日、放課後になれば剣道部が振るっている、竹で出来た模造刀。遥香が持つと違和感しか無いソレが二振り。言うまでも無く、俺と男の分である。

「怪我だけは、しないでね」

言いながら、俺たちに竹刀を手渡す遥香。流石に心配しすぎだろ、なんて軽口を叩こうとした瞬間、ずしりと感じた重さに言葉が引込んだ。

いや、ずしり、という表現は少々誇張気味かもしれないが、少なくとも俺が想像していたモノよりはずっと重く感じる。万が一顔なんか当たったら……冗談では済まないだろう。

「今更止めたなんて無しだぞ、久遠」

俺の動揺を見て取ったのか、挑発する様にそう言う男。

「まさか。……よろしく頼むぜ——ニヒト」

そうだ、俺はもう無関係じゃない。言い訳して、人のせいにして。なんで俺が……そう言って遥香を置いて逃げるなんて……そんな事、出来る訳が無い。

だからやる。俺はやるんだ。

今度こそ——俺の右腕が遥香に届くように。

忘却校舎／特訓開始

「……ふわ、あゝ」

堪えきれず、俺はでっかい欠伸を一つ。意図せずに溢れる涙を右手で拭うと、鞆の中にノートやら筆箱やらを詰め込む。時間は放課後。生徒も疎らな、そんな教室。

どうやら眠っていたようだ。ホームルームの途中から、記憶が飛んでいる。

……まあ、しょうがないか。

今朝の特訓を思い出し、俺は少しだけ苦笑いを浮かべる。あんなに運動したのはいつ以来だろうか……クタクタになるのも無理はないだろう。

二ヒトとの特訓は、俺の想像の斜め上をいくモノだった。

なにせ俺は、基本的な体力作りや、さもなければ剣の使い方を一から教えて貰えるんだとばかり思っていたのだ。それがまさか開口一番「よし、じゃあかかって来い」なんて言われるとは……。

曰く、基礎からやっていたら、基礎が終わる前に化物に殺されてしまつとか何とか。確かに、俺に必要なのは『基礎から固めた上手な技』では無く『今晒された現状から生き残る術』なのだ。そういう意味で、実戦形式での訓練は理に適っているのだろう。

「……適ってるのか？」

廊下を歩きながら、自分の思考にツツコミを入れる。駄目だな…
…疲れのせいか頭がボーっとして、考えが上手く纏まらない。

いかんいかん、シャキッとしろ、俺。帰ったら今度は魔術の訓練だ。

誰かに目撃されるとマズイので、朝は剣術、夜は魔術と時間を分ける事を提案したのはやっぱり二ヒトだった。何だか掴めないキャラクターだけど、そういうところはキチンと考えてるんだな。

などと若干失礼な事を思いつつ昇降口に辿り着いた俺は、モソモソと靴を履き替え、いつもよりゆっくりとしたペースで帰路に着いた。

……

「ただいまあ」

我ながら随分と気の抜けた声が出たもんだなあなんて思いつつ玄関を開ける。と、中からは俺に負けず劣らずに気の抜けた声。いや、どちらかと言うと間の抜けたってのが正しいな。無論、遥香である。

「おかえり」

ドタドタとやってきた遥香は制服姿のままであった。今日は木曜日……遥香の好きなテレビドラマの再放送日であるから、恐らく帰宅後すぐにテレビに齧りついたのだろう。

「着替えた方が良いぞ。シワになるから」

「あ、はぁーい……えへへ」

突然小さく笑い出す遥香。何だ何だ、思い出し笑いか？

「キモっ」

「えーっ」

くーちゃんひどーい、なんてぎゃあぎゃあ騒ぎ出す。甲高い声が疲れた頭をぐわんぐわん揺らして、正直ちょっと気が遠くなりそうになる。

「っだあ、やかましい！ 酷いと抜かすんなら、唐突に笑った理由を説明したまえ。二十字以内で」

居間へと移動しつつ、遥香を黙らせる為にそんな事を言ってみた。遥香の事だ、答えを考えているうちに自分が怒っていたなんてすっかり忘れてしまう筈。というか、そもそも怒ってるワケでもないんだろうけど。

「くーちゃんの台詞お父さんみたいだった」

「……は？」

サラッと言われたので、聞き逃してしまった。

「だーかーらー、くーちゃんの台詞お父さんみたいだった」

一呼吸おいてから、俺は指を折りつつ遥香の言葉を反芻する。

右手の親指から小指まで折って、開く。その動作を二セット。

ちらりと視線をやる。得意満面といった表情で勝ち誇る遥香。ぐぐ、遥香のクセに生意気な。

「キモっ」

「あーっ、また言ったあ！」

いかにも怒ってます、といった風に頬を膨らませる。これが漫画だったら頭にそれらしいマークが見えたことだろう。

そんな遥香を華麗にスルーしつつ、俺は部屋を見回した。勿論、二ヒトから魔術とやらの勉強を受ける為であるが……。

何故かその姿が見当たらない。空き部屋は結構あるが、いかにせん家具が無いのでまだ二ヒトの個室は無い。であるから、アイツが居間を除いてこの家で行く所なんて無い筈なのだけれど。

「それとも、何も無い部屋で瞑想とかしちゃうタイプなのか？」

「くーちゃん、独り言言ってる……」

何故かニヤニヤしながら俺を見る遥香。「なんだよ」、「視線だけで訴える。と、遥香はまたしても勝ち誇り顔を決め、それからボソツと言った。

「きもっ」

「……」

無言のまま一步二歩。遥香へと間合いを詰める。

今の台詞を言えて心底満足したのか、遥香はこれ以上ないって位にご機嫌だ。

……ふ、危機感の欠如したうさぎちゃんだ。ここがサバンナなら、お前はもう死んでるぜ。

「オラあ」

隙だらけな遥香のこめかみを両の拳で挟み込む。この間実にコンマ八秒。そうして遥香の制止の音が響くよりも早く、俺は両拳をぐりぐりと遥香のこめかみに押し付けた。

「ひいん、痛い痛い痛い」

「ふはは、思い知ったかポンコツめ。さあ、止めて欲しければ久遠さまごめんなさい、今晚の夕食は鶏の唐揚げにします」と言うのだあ」

さり気なく別の要求も混ぜるが、この状態の遥香にソレを判断する余裕はあるまい。我ながら完璧だ。

なんて勝利の余韻に浸っていたら遥香の奴、更にでかい声で騒ぎ出しやがった。

「うわ〜ん、痛い。痛い痛い痛い痛い」

「ちょ、おい、あんまりでかい声出すんじゃない！ ご近所の迷惑になっちまうだろ。ってーかそんなに強くやってないしっ」

「うわぁー……ん、痛もがっ。ん……ん……」

慌てて遥香の口を塞ぐ。俺の両手が後ろに回る心配もそうだが、何よりグルグルする脳みそが警鐘を発したのだ。気を抜くと、本当に意識が飛びそうである。

俺が右手を口へと動かした事で痛みから解放された遥香は、ようやく静かになった。涙目で何かを訴えようとしているが、俺は先手を取る事でソレを回避する。

「で、二ヒトはどこだ？」

「……へ？」

「いや、夜は魔術講座って言ってたろ？ 肝心の先生がいないんじ

「何も出来ないぞ」

俺としては至極もつともな事をいったつもりであったが、何故か遥香は頭にハテナマークを浮かべている。

そうして、「んー」と首を捻った後、遥香はポンと手を打って言った。

「なあんだ、くーちゃん勘違いしてたのか。魔術の先生なら、ホラ、目の前にいるよ?」

「ここぞとばかりにふんぞり返る遥香。無駄に育った胸を張って、「ふふーん」と再び勝利ポーズを決める。

「?」

俺はわざとらしくそのデカイ胸を無視して、視線を左右に動かす。無論、コイツの言っている事は理解した上で、だ。

「もう、私私! イッツミー! 魔術の先生はペケちゃんじゃなくって私なのつ!」

「ペケちゃん?」

聞き慣れない単語。あ、いや、文脈から『ペケちゃん』とは『二ヒト』の事であると予想出切るんだけど、俺としてはなぜ二ヒトがペケになったのかっていう点が気になったので聞き返した所存であります、はい。

「うん。二ヒトってのは、ドイツ語の否定を表す言葉なんでしょう？ つまりバツテンというワケだから、ペケちゃん。そっちの方が言いやすいし、可愛いよね」

どういうワケだよ！ とツツコみたい衝動をグツと堪える。とりあえず二ヒトからペケへ至った経緯を聞いたので、話を本筋に戻そう。脱線が酷くてしょうがない。

「オーケー、解った。んで、そのペケは何処へ？」

「ただいまペケちゃんは街のパトロール中。とりあえず霊的ポテンシャルの高い地点を探してもらっています」

そうすれば街全体から、数箇所ないし数十箇所に悪魔の出現地点を絞れるからね。と遥香はやや饒舌に語った。

霊的ポテンシャルが何なのかは解らなかったが、まあ言わんとしている事は理解出来たので先に進む。

「凶被いの仕事ってワケか。よし、んじゃ俺たちも俺たちに来る事をしようぜ」

「そうだね。それじゃ早速始めよっか」

首を縦に振り、同意を示す。が、何故か遥香は「よっこいしょ」と椅子から立ち上がる。

どういう事だ？ 疑問に思う俺を尻目に、遥香は居間から出て行き……「ほらあ、くーちゃんも早くっ」……どうやら勉強会は部屋の外でやるらしい。

やや足早に歩く遥香の背中を追いかけて、辿り着いたのは家の裏庭。部屋の外どころか家の外に出てきてしまった。

「流石にお部屋の中であんなに大きな剣を出したら困っちゃうからね」

俺の疑問に先回りで答える遥香。確かに、部屋の中であんなサイズのモノを、しかも七本も出すワケにはいらない。あの時の光景を思い出し、納得する。

同時に、『魔術講座』が魔術を一から教わる勉強会ではないと理解した。いや、朝の特訓を思えば……『基礎から固めた上手な技』

では無く『今晒された現状から生き残る術』を求めている俺にとつて、むしろソレは当たり前の事であるのだ。部屋の中で椅子に座りながらやるモンだと思っていた自分が恥かしい。

「じゃあ、とりあえず術式の起動方法から説明するね」

ゴクリ。唾を飲み込む。『術式の起動』とは、即ちあの剣……断罪すべき七つの大剣……を呼び出すという事だろう。

実際に体感しておいて……戦う、そう決めておいて……ソレでもまだ、心の底で否定している俺がいるのだ。

いや、違うか。否定、ではない……その感情は、むしろ躊躇に近い。……小心者なんだろうな。我ながら情けない。

自分の意思で魔術を使う。ソレがまるで、今までの自分を捨てる事と同義なんじゃないかって、そう考えてしまう。だから俺は躊躇してしまう。

「くー、ちゃん？」

まるで俺の心情を察したかの如く、複雑な顔をする遥香。

……かえってソレが効果的だったのかもしれない。

今度こそ確実に、俺の中の芯がブレるのを止めた。もう大丈夫。

俺は大丈夫だ。

夜が深まる。俺と遥香、二人だけの空間は次第に静けさを増していく。

魔術師の、裏側のセカイだ。俺はハッキリと感じ取った。

温い風が吹いて、裏山の木々がざわざわと鳴いた。

忘却校舎／欠けた一振り

「……目を閉じて」

奇妙な空気が漂う、夜の裏庭。遥香の声だけが、俺の知っているセカイのモノだった。

風いだ水面の様な……或いは、凜と鳴る風鈴の様な。遥香が一言喋る度、その声が耳へと届く度……ずっと、俺の体を清い流れが通り過ぎていく。

無論、ソレは錯覚で……ただの、俺のイメージである。けれど、寄る辺無いこの夜において、慣れ親しんだ彼女の声は何よりも俺を惹きつける。安心させる。

「……呼んで。あの剣の名前を」

その声の通りにしないといけない。このセカイでの俺は、孤児にも等しい。だから何の疑問も無く、俺は遥香の言う通りに『呼びかけた。』

閉じた視界には、黒の荒野。何一つ無い、絶対の虚空。

口を開く時。剣の名を思考した瞬間。声を出すその刹那。

絶対色を切り裂き輝く、七つの燐光。その淡い光が存在を増す。

セブンス
「断罪すべき——」

呼吸の様な自然さで、歩みの様に軽やかに。

グリモワール
「——七つの、大剣っ」

セカイに生まれ、死んでいくその摂理と同様に。当たり前みたい
に。

剣は、いとも簡単に現れた。

「で、出来たっ」

幾本かの剣が、地面から生える様にして、俺の正面に並んでいる。

まさか、魔術がこんなにも簡単に使えるなんて……。拍子抜けし
た、と言ったら罰が当たるだろうか。

遥香はポカンと口を開け、俺と剣を交互に眺めていた。

「——お！ いたいた」

突然、背後から声上がる。振り向くと、疲れた表情を浮かべたニヒトが立っている。どうやら街の見回りとやはら終わっただけらしい。長身を揺らしながら、ゆったりとしたペースでこちらに歩み寄るニヒト。俺、遥香、剣の順に視線を動かすと、ふんふんと何やら一人納得した様子。

「お疲れ様！ どうだった？」

いつもの調子で首尾を聞く遥香。ニヒトは、ん、と少し考える素振りを見せてから口を開いた。

「ソレっぽい所は何箇所か。元々探查系は苦手なんだけど……今にも連中が染み出してくるってトコは嫌でも解るからな。定期的に街を見回ってりゃ、そう大事には至らないだろう」

ま、勝手が解るまではちょっと危ないかもしれないが。そう結んで、ニヒトの報告は終了した。

「了解です。それじゃあ、お風呂でも入ってゆっくりしてね」

ピシッと敬礼のポーズをとって了解の意をダイナミックに表現し

た後、家の方を指差して遥香が休憩を促す。

「そいつはありがたいんだけど……先に夕食にしないか？　今日はやけに腹が減る」

お腹の辺りを右手でさすり、空腹を訴える。遥香は少しだけ困った様な表情を浮かべ、「うーん、くーちゃんの練習が終わってからにしようと思っていたんだけど」と言った。

「練習……って、術式の起動はもう出来てるじゃないか」

地に触れず、宙に浮いている凶器。ソレを眺め回しながら二ヒトはそう呟いた。

大きさも形もバラバラな、一見すると剣かどうか怪しいその群れは、降り注ぐ月光を浴びて青白く発光している。

「——うん？」

疑問の声。俺と二ヒトのモノである。どうやら同じタイミングでソレに気がついたらしい。

俺は指を折りながら、左から順に剣の本数を数えてみた。

「一、二、三……四、五……………六？」

昨日の夜に聞いた話しでは、剣は七つの筈だ。ところが、だ。今俺の目の前にある剣の数は六本。これは一体どういう事だろうか。

「ろく！？」

遅れて声を上げる遥香は慌てて本数を数えてから、訳が解らないという様な表情を浮かべた。

「……………どういう事だろ」

うーんと唸る遥香を横目に、俺は六本の中で最もシンプルな剣を手を取った。

何故そんな事をしたのか、自分でも良く解らない。ただ何となく、右手が吸い込まれる様に剣へと伸びたのだ。

握りの感触に覚えがあった。ああ、これは猟犬に襲われた時、俺が使った剣だ。あの時は無我夢中でまったく気がつかなかったが、剣つてのは思ってたよりも重いんだな。

そんな風な、取り留めの無い様な事を考えていると、唐突にニヒトが声を上げた。

「昨晚、刹那は確か『呪文書は、七つの大罪を書き記したモノ』だと言ってたな。ってのは、一冊につき一つの罪、悪性を扱ってるって認識で良いのかい？」

一瞬待って、遥香は頭を縦に動かした。肯定の意味だろう。

「という事は、剣一つ一つが七つの大罪のいずれかに対応しているって訳だから……ええっと、どれがどれだかは解る？」

「うっ、流石にそこまでは解らないかも……」

何やら二人だけで話しを進めている様子。正直まったく付いていけないので、俺は他の剣を眺めたりしてみる。

何度見ても、目の前の物体は俺の持つ『剣』のイメージからかけ離れていた。すんなりと剣だと思えるのは先ほどのモノだけで、その他の五本は、剣というにはあまりにも異形だ。

「これなんて鉄パイプじゃねーか、穴開いた軽量仕様の」

六本の中で最も細いその『鉄パイプ』を手にとってみる。と言っても鉄パイプは刀身に当たる部分だけで、柄は黒い棒を縦に二本連

結した様な作りになっていた。片手で持つと柄が半分以上余る……恐らくこの剣は、本来両手で持つモノなのだろう。鐔の部分は円錐の頂点をスパツと切り取った様な形、とも言えば良いだろうか？切り取られた頂点からは鉄パイプが、底面からは柄がそれぞれ伸びている。また、鐔から柄に向かって銀色のパーツが飛び出しているが、用途がまったく解らない。柄を握った指を保護するモノだろうか？ 何から何まで謎だらけである。

「七つの大罪つてのは、強欲・憤怒・嫉妬・傲慢・暴食・色欲・怠惰だが……この中で久遠に欠落してるモノがあるとすれば、どれだと思う？」

「えーっ！ くーちゃん、煩惱は人並みにあるからなあ……」

「ちよつ遙香さん、随分言ってくれやがりますじゃねーかコラ！」

何やら話しが妙な方向に進んでいたので横からツツコミを入れる。ちなみにその辺に放り投げた鉄パイプは地面に触れるか触れないかの所でふよふよと浮かんでいる。他の剣も同様に浮いているので多分、そういうモノなんだろう。

「まあまあ、他に思いつかないんだし良いじゃないか。しかし……術者によって効果がマチマチな術式とは奇怪だなあ。や、逆にそういう制限を設ける事で強力な魔術を術式に落とし込んだのか？」

「あつ、解った！ くーちゃんに足りないのは性欲だよ！ こないだも私のパンツ見たつていうのになーんも反応しないし！」

「ほう、そうなのか？」

「っだあ！ 真面目な話しをするのかしないのかハッキリしろ！ 何なんださつきから」

何が何やら解らなくなってきたので、一旦話しを中断させる。正直、混乱しそうだ。

「すまんすまん。が、別にふざけてる訳じゃないぜ？ 腹も減ってるし手短に伝えるが……剣が一本足りないのは、内的要因によるモノだと考えられるって話しを、俺と遥香はしていたんだよ」

内的要因？ 内的って言うのはつまり外的の反意語であって……。この場合、その『内的』が指し示すのは……俺、か？

「そう、君……と言うよりは『断罪すべき七つの大剣』の術者と言った方が正しいだろうな。魔を惹きつける程の魔力を持った本、ソレも複数を具現させる強力な術式……条件・制限はむしろ在って当たり前なんだ」

うーん……理解できたようなそうでもないような。七本目が現れない原因が俺にあるとして、じゃあその原因つてのは何なんだ？ 煩惱だとか欠落だとか言われてもピンとこない……自分で言うのもアレな話したが、色欲だって人並みにはあるぞ、多分。

「人並みに色欲あるのにパンツ見て無反応ってどういう事よお！」

何やらプンプン怒っている遙香。随分とそこを引っ張るが、あの時は事情が事情だったし……。

「つつーかお前のパンツは見慣れてるんだよ」

「ひっどーい！」

「あー……とりあえず保留にしないか？ 今はこれ以上進展しないだろうし、腹も減ったし」

脱線しまくった場を二ヒトがまとめる。確かに、ウダウダやって解決策が見つかる訳でも無い。俺は同意を示すと、若干不満げな遙香を引っ張って家の中へと帰った。

……

「――」

ソレは、多分声だった。

暗闇の中、俺の名前を呼ぶ声。懐かしい響きは、いつか聞いた遠い記憶。力強く、でも安心する様な……そんな父親の、声。

そう、ソレは紛れもなく――父さんの声だった。

何も存在しない暗黒の中、父さんの声だけが一筋の光明の様に俺へと届く。コレは夢なのだろうか？ 或いは、あの世、か。死んだ人間の声が聞こえるなんて……そんな事が起こり得るのは、このどちらかしかないのだから。

「――夢だよ、久遠」

五年ぶりに聞いた父の声は、ハッキリとそう告げた。

俺は顔を左右に動かして……闇の中、父さんの姿を探す。

けれどどこにも父さんはいなくて……在るのはただただ広がる無垢な黒。

懐かしい声が、暖かい声が聞こえるのに……だってのに、その顔を……あの瞳を見る事が出来ないなんて！

こみ上げるモノを止める事が出来ず、俺の目からは涙が溢れた。

胸が、キュウと締め付けられる。「ごめん父さん。高校生にもな
って、みつともないね」発した声はしかし、虚空に消えた。

「大丈夫、父さんには届いたから」

その姿が見えていたのなら、優しく笑っていただろう。ニッコリ
と微笑んだ父さんが脳裏に浮かんで消える。

「時間があまり無いから、一度しか言えない……良く聞いておくれ」

真剣な声。俺は耳に全神経を集中する。父さんのそんな声を聞いた
事なんて、今まで一度だって無かったから。

晴れる事の無い闇の中、ポツリポツリと紡がれる父さんの声はま
るで夜空に瞬く星々の様に……俺の心を少しずつ照らしていた。

忘却校舎／夢うつ

「すまなかった、こんな事になってしまつて」

震える言葉。同時に、父さんが頭を下げた様な、そんな気配を感じた。

「出来るなら……魔術なんてモノに関わつて欲しくは無かつた。普通の、人並みの生活を送つて欲しかつた……」

「……父さん」

闇に溶けると解つていても、俺の口からは自然と言葉が零れた。

「……けれど、どうやらソレも無理なようだ。術者の意識とは無関係に術式が発動してしまう事など、本来はありえない筈なのだけだ……とにかく、魔道書が目覚ましてしまった以上、原因についてとやかく言つても仕方がない。久遠にしてみれば、凄く理不尽な事に感じるだろう。ふざけるなど、怒つてくれても良い。でも、久遠がこれから生きていく為には、魔術を知るしか方法が無いんだ。剣を使い、身に迫る悪意を撃退しなければならぬんだよ」

自分を責める様な叫び。父さんの言葉はむき出しの感情そのもの

で、俺の心を強く打った。

「だから、聞いて欲しい。生きる為に」

頷く。必死に話す父さんへ報いる様に、真摯な気持ちで。

「……剣が人の原罪を記している事、同時に強力な魔道書である事は遥香ちゃんからも聞いたね。父さんが久遠に教えるのは、魔道書の効力……七本それぞれの持つ力だ。久遠が『敵』に襲われた時、生き延びる為には剣の持つ力を使いこなす必要がある。何も知らずにいるのとそうでないのと……その違いは決定的だからね」

父さんの言う事は最もだろう。自分が選択できる行動、切れる札を知らなければ……ソレはあまりにも無防備だ。

「『怠惰』の書の力を使って、握った剣の情報を自動的に久遠へと送るようにする。本当なら全部を父さんが説明したかったけど……どうやらもう時間みたいだ」

徐々に遠くなる声。なのに俺の意識は少しずつハッキリとしていく……目が覚めるのだろうか。

嫌だ嫌だ。起きてしまったら、父さんがいなくなってしまう。

「久遠、父さんはもういないんだよ。これはただの夢だ」

「そ、そんな事、言わないでよ！」

ああ、父さんが行ってしまう。話したい事が……聞きたい事が、
沢山あるのに。それなのに。

「こんな事しか出来ない親ですまない……でも、久遠なら大丈夫だ
って信じているよ。父さんも、母さ」

最後はもう、殆ど聞き取れなかった。

そして、夢が……終る。

奇跡みたいな夢が。

……

「父さんッ！」

声を上げて、布団を跳ね飛ばした。射す朝日と見慣れた自室……
覚醒してしまった事実を突きつけられて、俺は堪らなくなる。

死んだ、父さんも母さんも死んだ。そんな事は解ってる。

もう……大丈夫だと思っていたのに。

「……ちっ」

思わず舌打ちをしてしまう。なんて、残酷な夢だ。

知らず流れていた涙を拭い、視線を正面へ向ける。何時から現れていたのだろうか、其処には大剣の中で最も簡素な一振りがモノも言わずに佇んでいた。

「お前のせいで、目が覚めちまったじゃねーか」

宙に浮かぶ十字が、まるで墓標のようで……俺は悪態を吐いた。

なんとなく、ソレの柄を握る。そうする事でその剣の情報を得る事が出来るって、父さんは言った。けれど、今ソレをしたのは別に父さんの言葉を確かめるとか、そういった意図によるものではない。最初に言った通り、ただなんとなくである。

普通の金属とは思えない、奇妙な感触。硬質さと柔軟さを兼ね合わせたさわり心地。何よりも、微かに暖かいのが印象的だ。

その熱を感じた刹那、脳裏に弾けるイメージがあった。

「——ッ！なるほど、コレが……」

剣の情報を得るという事。俺はその剣の柄を握っただけで、ソレが『怠惰』と呼ばれるモノである事と、情報伝達的能力を持つ事を理解した。

そして同時に、その剣の力が殆ど全て枯渇している事に気が付く。これはどういう事だろう。疑問に答えたのは、『怠惰』に残された父さんからの最後のメッセージだった。

「追伸。『夢』を媒介とした死者との会話は、大儀式級の魔術だ。代償として『怠惰』に内蔵されている魔力のほぼ全てを使い切った故、ソレが回復するまで能力は使用できないので注意されまし」

内容はともかく、父さんの声に不意をつかれた俺は、また少しだけ涙ぐんだ。

「……なるほどな。て事は、昨日のアレは本当に奇跡的なモノだったワケか」

『魔力』とは、文字通り魔を成す力の事である。多くの場合、魔術師は自身の魔力と引き換えに神秘の業を行う……昨夜、夕食の

最中に遥香がしてくれた説明を思い出す。同時に遥香は、断罪すべき七つの大剣に宿っている魔力の量は通常の魔術師数人分になる事を教えてくれていた。

魔力の回復つてのが、どのくらいかかるものか解らない以上、『怠惰』の能力は当てにしない方が良いか……。

なんて考えていた俺の耳に飛び込んでくる、カシャっという人工的な音。唐突な出来事、俺は音の出所を探す様に部屋の入り口へ視線を移し……口をあぐりと開けた間抜け面のまま固まる遥香を見る。

「……おい」

「っ、つつつ、遂に……っ。遂に激写してしまった！ くーちゃんの泣き顔！ こ、ここコレは強請れるよ！！ ど、どうしよう……ハアハア」

右手で携帯電話を操作しつつ、左手で額の汗を拭う遥香。

おいおい、良いのか？ 携帯の画面なんか見えて。

ゆっくりと、音を立てずに布団を抜け出る。遥香の視線は未だ携帯の液晶画面だ。気付かれた様子は無い。

射程距離まで近づいた俺は、奴へと声をかける。いわゆる最後通達って感じ？

「おい」

「ひいッ！」

俺の接近に全然まったく気がついてなかった遥香は、何とも情けない悲鳴を上げた。

「今すぐソレを消したまえ。さもなければ……解るな？」

「あ、あう……あうう」

まるで我が子を庇う母親の様に、携帯を胸に抱き、必死な視線を俺へと送る遥香。

馬鹿め。そんな抵抗に意味など無いと教えてやろう。

「の前に、十秒の猶予をくれてやる。決断は早くした方が良いぞ」

言い終わるや否や、俺は大きな声でゆっくりとカウントダウンを開始する。

遥香はぎゅっと両目を瞑り、何やら逡巡している様だ。

くくく。素直に消すもよし、抵抗の姿勢を貫くのもまたよし……。どちらにせよ、お前の行く先は一つ。って、何か俺ちよつと悪役っぽいな。

「く……すまない、お前たち。私も後から行くぞ……」

何だか良く解らないキャラで、携帯を操作し始める遥香。なかなか素直じゃないか。

「……やっぱり駄目！ 惜しすぎっ、毎日登下校おんぶしてもらっ私のニューデイズ……！」

「抵抗の意思を確認……ってなんだその図々しい目的は！？ 良いからその携帯をよこしなさい！」

テンカウント終了直後、俺は遥香の携帯を強奪すべく実力行使にうつてでる。

ぎゃあぎゃああと騒ぐ遥香。俺の熟達された攻撃はまるで精密機械のソレの様に、奴のへなちよこディフェンスをかいくぐる。

「ふ、十年早かったなあ！」

「あああ、消されてしまおう。私の夢の結晶が！」

「黙らっしゃい！ 強請りなんてブラックな野望は、この俺が打ち砕く」

なんてバカなやり取りを聞きつけたのか、廊下の向こうから接近する人影。二ヒトだ。

床板をギシギシさせながら現れた二ヒトは、俺たちを見るなり「乳繰りあつのは結構だが、そろそろ遅刻するんじゃないか？」なんて言った。

「げ、本当だ。まだ飯も食ってないってのに」

「乳繰りあうだなんて、そんなあゝ」

なんで同じ話を聞いてこうまで差が出るのか、なんて事すら考えてる余裕は無い。俺は二人がいるにも関わらず、ダッシュで着替えを済ませた。

「……って、今日の特訓は」

「ああ、学校が終ってからにしよう。慣れない術式の起動で、思ったよりも体力を使っている筈だから」

確かに疲れている感じはするが……動けない程じゃない。まあどつちにしろ時間が無いんだから無理か。

「解った、それじゃあ帰ってきてから頼む。おい遥香、行くぞ」

「わ、引つ張らないでよぉー」

ドタドタと小走りに家を出る俺たち。今日は空腹との戦いになりそうだ。なんて考えていれば、起き抜けに感じた寂しさも少しだけ和らぐ様で……俺はちよつとだけ複雑な気分になった。

……

「……アレ、くーちゃん？」

放課後、黄昏に包まれる教室の中、俺は遥香に呼びかけられて目を覚ました。

そついや、昨日も寝ちまったんだっけ……やっぱり、何だかんだで疲れてるんだろうか。

「よお。何してんだ？」

一人教室に取り残されている所を見つけられたバツの悪さから、俺は極めて明るく問いかけた。

「あ、うん。忘れ物しちゃって……くーちゃんは？」

「んー、ちょっと居眠りしてたみたいだ」

何気なくそう答えると、遥香は奇妙な表情を浮かべて、言った。

「え、くーちゃん寝てたの？ 教室からお話する声が聞こえたから、てつきり起きてたんだと思ってたけど……」

「話しつて、俺が？ 誰と？」

不思議に思い、遥香に尋ねる。うーん、と少しだけ首を捻った後、遥香は気のせいだったのかなあと呟き、答えた。

「隣のクラスの灰尾くん。教室から出てくの見えたし……でも、声

は良く聞き取れなくって……誰かが喋ってるのだけは解ったんだけど」

「灰尾……って、何かあの地味な？」

合同体育の授業の時に見た、灰尾の顔を思い出す……が、どうも記憶があやふやでピンとこない。それほどまでに地味な奴なのだ。

じゃなくて、問題は……。

「俺、アイツと話した事なんてないぞ」

そう。俺は灰尾と友人関係にあるどころか、そもそも会話をした事すら無い。そんな俺が、放課後アイツと談笑するなんて、よほどの事が無い限りありえないだろう。ってかそもそも俺は寝てたし。

「独り言だったんじゃないの？ それはそれで怖いが」

「そうかも。それとも、私が気付かなかったただけで他にも誰かいたのかな」

遥香がやけに怖い事を言い出す。これから暗くなるっていつのに、なんて事をしてくれるんだコイツは。

「まあ良いや。それより、そろそろ帰ろうぜ」

放課後の教室に長居は無用だ。俺は遥香を促す様にして、教室を出る。

それでもまだ気になっているのか、遥香はうんうん言っていたが、程なくしてひよこひよここと後を付いて来た。

誰もいない教室は、耳が痛いほどに静まり返っていた。

忘却校舎／選択肢

時計が鈍い音を鳴らす。回数は八。午後八時をまわった邑森家の居間には、これ以上ないってくらい緩みきった空気が充満していた。

お風呂上りの遥香は頭から湯気を立ち昇らせながら、アイスを片手にテレビを見ている。

ニヒトはニヒトで、難しい顔をしていると思ったら新聞のクロスワードをやっているだけ。

かくいう俺もお気に入りの模型雑誌を広げ、次は何を購入しようか、なんて事を考えていた。

「お、これもう出てるのか」

チェック洩れてたな、危ない危ない。お気に入りシリーズの最新作だから、買い逃さないようにしないと。

「あ、そうそう、クーちゃん」

メモ帳に購入予定物を書き込もうとした矢先、遥香が突然呼びかけてきた。

俺はボールペンを走らせながら、「どうしたー」と返事をする。

「……明日なんだけど、暇だったりする？」

「明日あ……？」

冷蔵庫にくつつけてあるカレンダーを一瞥する。明日は九月十三日土曜日。言うまでも無く学校は休みであるから、健全な学生は何かしらの予定を入れていて然るべきである。ソレは買物であったり、はたまた旅行であったり……或いは、意中の彼女を誘つてのデートであったり。無論、俺もれっきとした高校二年生であるから、その様な事情の一つや二つあつたっておかしくは無い。

「……暇だな」

おかしくはないんだけど、何故か暇だったりするんだこれが。理由は推して知るべし。

なんていう俺のちょっとアンニュイな心中などお構い無しに、遥香は「あ、やっぱり」なんて言いやる。

悔し紛れに何か言い返してやろうとも思ったが、やめておく。ソレよりも、何故遥香が俺の予定などを尋ねてきたのか、という事の方が重要だ。

「……で、俺が暇だと何かあるのか？」

パタン。乾いた音。閉じた雑誌をテーブルの隅にどけ、遥香に続きを促す。

食べ終えて棒だけになったソレを指揮棒の様にくると動かすと、遥香は大層ご機嫌な声で言った。

「うん。明日ね、隣の高校の文化祭があるから一緒に行こうよ」

「文化祭かあ、うーん」

どうせ暇なのだから付き合っても良いんだけど、若干面倒だったりもする。遥香は隣の高校と言ったが、電車だと駅三つ先だし。駅から歩くし。

「まあ良いか。受験の時以来だし、遊びに行ってみるのも悪くないな」

「ホントに！？ いえーい！」

しゅぱつと立ち上がって、大げさに喜ぶ遥香。ぴよんぴよんと跳ねるモンだから色々大変な事になっているが、本人はまるで気に

していない。

昔からだか、コイツはなんていうかそういう所が解っていないと
いうか……いやむしろ解ってやってるのか？ いやいやいや、遥香
に限ってそんな頭脳プレーは有り得ない……って、何を一人悶々と
しているんだ俺はっ！

とりあえず目の毒なので遥香をなだめる事にする。

「遥香さんや、ちょっと落ち着きたまえ」

「あ、ごめんなさあい。えへへ」

意外に素直じゃねーか。手間がかからなくてナイスだ。

「……で、明日は何時ごろ出発するんだね？ 出来ればお昼過ぎが
良いんですが」

この後二ヒトとの特訓がある事を考えると、出来ればゆっくりし
た予定を組んで欲しいところ。自慢じゃないが、体力は人並みな
だ。

遥香は少し考えて、じゃあウチでお昼を食べてから出発だね、と
言った。

文化祭で色々と間食する事を考えると予め昼食を食べていくはいいだけ無い気もするが……まあ無駄遣いが減るという事で、良ししよう。

余談だが、俺達の生活費は月の頭に遥香の両親から振り込まれるという寸法になっている。無論の事、俺もそのお金にご厄介している。なんていうと、寄生虫もかくやといった感じだが、経緯はどうあれ事実としてそうなのだからなんとも情けない話である。

俺の名誉の為に言い訳だけさせて貰うと、過去に一度だけ遥香の両親に「働きます」と告げた事もあったりするが、猛烈な勢いで却下されてしまった。理由は良く解らないが、あんな剣幕で捲くし立てる二人を見たのは初めてだったので（特におばさんの方は物凄かった）俺としても意見を曲げざるを得なかったというかなんというか……つまりそういう事なのです。どういう事だ。

話が一段落ついたところで、二ヒトの様子を窺う。クロスワードへ向けられていた視線がふっと上がり、思い出したかの様に言った。

「よし、特訓やるか」

答える代わりに、俺はすっと立ち上がる。無言のまま、二人で外へ。

ふと見上げた空には千切れた雲がいくつも浮かんでいる。数分間の周期で隠れるお月様は、その度に完全な闇を作り出す。

こんなんで特訓なんて出来るのだろうか……そんな俺の考えは杞

憂も良いところで。二ヒトは気にした素振りも見せず、俺へと竹刀を投げてよこした。

そうして……今日の特訓が始まる。

……

「っ……はっ……はっ……ふう……」

小一時間ばかり打ち合って、五分間の小休止。ゼーはーと肩で息をする俺とは対照的に、ケロリとした様子の二ヒト。一体全体、コイツはどういう鍛え方をしてるんだ。いや、そもそも俺の方が駄目過ぎるのだろうか……なんて考えてもみるが、落ち込みそうなので止めておく。重要なのはこれからだ。

「久遠。君の剣の事だけど……」

竹刀をクルクルと手中で弄びながら、二ヒトは落ち着いた調子で述べる。

「今、見せてもらえないか？ ちょっと考えがあつてね」

「あ、ああ……了解。ちょっと待って」

突然のリクエスト。俺は昨日の夜の事を思い出す。大丈夫だ、あんなに自然に出来たのだから。

目を閉じて……ゆつくりと、剣の名前を呼ぶ。

暗闇を切り裂く様に、セカイへと現れる刃の群れ。淡く発光する、六つの大剣。

「はぁ……出来た」

俺は胸を撫で下ろす。昨日はあっさり出来たが、今日もそうとは限らないからな。

「失敗なんてしやしないよ。コレは元来そついうモンだ」

言いながら、二ヒトは剣をしげしげと眺める。こついう事に詳しいであろう二ヒトにとっても、この剣は珍しいのだろうか。

「で、ええと、『剣を持てばその力が解る』んだっけ？」

夢の中で父さんが教えてくれた事。『怠惰』の書的能力。俺はこ

くんと頷いて肯定する。

「そういや、まだ『怠惰』の能力しか知らないな。朝は結構慌しかったし」

俺は別の剣へと手を伸ばそうとして――

「ストップ！」

――ガシッと、二ヒトに腕を掴まれる。

「……？」

理由も解らず、俺は二ヒトへ疑問の視線を投げる。

握っていた腕をパツと放すと、二ヒトはごほんと咳払いをしてから言った。

「久遠。今全部の力を知るのは、あんまり良い事じゃない」

「え、何でだよ。何が出来るかを把握しておく必要はあるだろ？」

そう父さんは言っていたし、当然の事だと俺も思う。

が、ニヒトは首を横に振ってから、俺の言葉をやりわりと否定する。

「確かにそれはとても重要だ。状況に応じて最適な行動をする為には、自分に与えられた選択肢がどういったものか、どの程度あるのかを知らなければならぬ……が、だ。久遠の様な半人前が一度に沢山の選択肢を与えられてしまったらどうなると思う？ 最適な行動を最速で選択出来なければ、結果としてソレは不必要な隙を晒す事になる。選択肢が多すぎれば、迷いを生む事にもなり得るだろう」

「——っ、そりゃ、そうだけど」

厳しい台詞だ。ニヒトがそんな言葉を口にするのは初めてで、俺は少しだけ戸惑った。

勿論、言われた事は理解できるし、逆らうつもりもない。だがしかし、ならば俺はどうすれば良いと言うのだろうか。

半人前の俺の、唯一の武器である魔法の剣。化物どもに襲われて、唯一生き延びる可能性を生み出してくれるソレらを使わないなんて、そんなバカな話があったたまるか。

なんて俺の考えは、どうやらお見通しだったらしい。ニヒトは少しだけ表情を緩めると、やりわりとした口調で話します。

「とは言ったものの、流石に手札がすつからかんというのは困りものだ。札を切るのに時間がかかるのは問題だが、そもそも切る札が無いというのは問題外だからね。そこで……だ」

一旦言葉を区切る。スツと手を上げて六本の剣を指差すと、ニヒトは続きを口にした。

「一本だけ剣を選んで、暫くはソレと『怠惰』の二本だけを使う事にしよう」

「……なるほど。選択肢を狭めりゃ、生まれる隙も最小ってワケか」

「もつとも、二択でも迷う時は迷うけれど……ああ、それとね久遠」

すうと息を吸い込む。真剣みを増す眼差し……俺は意識的にニヒトの言葉に集中する。たぶん、ニヒトは凄く大切な事を言おうとしている。

「……君が特訓する本当の目的は俺には解らないが、少なくとも今の君がしなければならぬのは『化物から身を守る事』だ。そのために君がしなければならぬ最も重要な選択はシンプルな二つ……逃げるか、戦うか」

ソレだけは忘れちゃ駄目だ……そう締めくくられるニヒトの話。

俺が特訓する本当の目的……か。

伸ばす右腕の、その先……掴めなかったあの日。

今度こそ、俺は――

――俺は、守りたい。

「あー、質問、良いか？」

「……なんなりと」

小さく咳払いをして、俺はニヒトへ尋ねる。たぶん、答えの解りきった問いを。

「本当に逃げちゃ駄目な時は……その話、忘れても良いんだよね？」

面食らった様な表情も一瞬で、彼は微笑を浮かべずりと答えた。

「そういう時は、逃げる事なんて考えちゃ駄目だろう?」

肩を竦めそう言う二ヒトに俺も笑みを返す。

さあ、特訓を続けよう。体が少し冷えてきた。

雲間に見える冷たい明かりに照らされて、俺は再び動き出す。

目的地は、まだ遠い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5896n/>

Seven Swords Story

2011年10月10日03時30分発行